
魔法少女リリカルなのはStrikerS Guardian Wings

ユウスケ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

魔法少女リリカルなのはStrikers Guardian
Wings

【Nコード】

N5520X

【作者名】

ユウスケ

【あらすじ】

禁忌から生まれし翼。闇に吞まれた子供。運命を切り開く閃光。想いを貫く星の輝き。四つの運命が絡み合い、交錯する。一人は生まれした意味を持たず、一人は復讐に焦がれて狂い、一人は生きるという事の意味を知り、一人は大切な想いに気づき、大いなる災いの予言が現実のモノとなる。 ※元々は別のサイトで掲載していた物です。アレンジがかなり施されてタイトルも違いますけど。

Prologue

無限の広さを誇ると言われている次元空間に浮かぶ世界、ミッドチルダ。

次元世界の秩序を保つ司法機関『時空管理局』の運営に大きな影響を持つ世界であり、魔法文化が最も発達している世界であり、ミッドチルダ式という魔法発祥の地でもある。故に、ミッドチルダは別名、第一管理世界と呼ばれる。

この世界での魔法とは、魔力素をリンカーコアに取り込み、特定の技法で操作し、術者の魔力を使用し「変化」「移動」「幻惑」「放射」のいずれかの作用を起こす事象を発生させる技術体系の事である。

これを行使するには魔力素と呼ばれる殆どの世界の待機中に存在する特殊なエネルギー体。これをリンカーコアと呼ばれる生命体の体内に存在する魔力を発生させる永久機関——目視は基本的にできないが特殊な方法で目視はできる光球——に取り込む事により、初めて魔力という魔法を発動させる為のエネルギーを得る。

そしてそれをより効率よく行う為の魔導^{デバイス}端末という魔法をプログラムとして記録し発動させる機械——ファンタジーに出てくる魔法使いの杖——にリンカーコアで生成した魔力を流し込む事で初めて魔法を発動させる事ができる。

しかしリンカーコアは先天的な突然変異とされ、例えばリンカーコアを持って生まれて来たとしてもその限界量——統一して魔力総量

というのは大きな個人差——成長期、もしくはトレーニングで増幅する事はある——がその殆どが生涯少量——最低ランクのFから始まり、高いと評され始めるAランク——で終わり、膨大な魔力——AAランク以上——を持って生まれてくる人間は極稀で、例えば両親が強大な魔力を持っているとしてもその子供まで強大な魔力を持っているとは限らない。

しかし、世の中には例外がある。その世界に微量でも魔力素が存在していれば、何十億分の一という確率で“天才”“鬼才”と恐れ讃えられる圧倒的な才能を持って生まれてくる人間はいる。

そしてこの世で初めて魔法を生み出した人もまた、そういった天才の一人であった。その人間はその魔法の力で世界中の国々を一つに統一、そして「ミッドチルダ」として統治するに至った。国という枠組みが無くなった今、国は都市として姿を変え、国同士が争う戦争はなくなった。

たった一人の人が産み出した魔法。そのあらゆる現代科学技術の更にその上をゆく技術力は、やがて魔力素を持つあらゆる世界に浸透していきミッドチルダ式と呼ばれる魔法体系を確立していった。

やがて世界で初めて魔法を生み出した人間は、自らの産み出した魔法発祥の地であるミッドチルダを見守らんと表舞台から退き、影からミッドチルダをありとあらゆる分野、方面から支え、世界を守護者としてその血筋を後世に繋ぎ続けた。

その者の名を残す資料は一つも残ってはいない。ただ一つ残っているのは、その人間の名前のみ。

その名は

カエルス・セレスティア。

第一話 採用試験

廃棄された都市に一陣の風が吹き抜ける、ミッドチルダ中央部の西ブロック。辺りの建物は荒廃し、時空管理局の訓練及び試験場として使われる場所の一つ。

その廃棄都市区画の建物の屋上に、長い金色の髪を風に靡かせて腕を組み、一人の灰色のスーツを着込んで佇む少年が居た。

《……そろそろ時間よ。シン》

彼の右腕に装着されている黒い宝石の付いた銀色の腕輪——インテリジェントデバイスのファフニールから女性の音声が響く。そのファフニールにシンと呼ばれた少年は「ああ……」と短く答えて碧眼の瞳で廃棄都市を見下ろす。

彼の名はシン・セレスティア。時空管理局に所属する魔導師の一人。そして、彼のデバイスのファフニールは、シンによって造られた完全オーダーメイドの専用機に分類される高級品だ。

ある事情から古代遺物管理部機動六課に異動する事になった彼は、無限書庫の司書長であり親友であるユーノ・スクライヤに推薦させて貰い、その条件として試験を受ける事になっている。

「ふんっ！ はぁ！」

「スバル。あんまり暴れてると、試験中にそのおんぼろローラーがイッちゃうわよ」

「うゝ、ティア。やな事言わないで。ちゃんと油も差して来た！」

シンの隣の建物の屋上には、銃型のストレージデバイスを弄っているオレンジ髪のツインテールの少女と、青髪の元気そうなショートヘアーに白い鉢巻をした少女が準備運動をしながら親しげな会話を交わしていた。

その会話からシンと同じく試験を受けにきたのだろうということが推測できる。ただし理由まで同じとは限らない。

両者は互いの存在に気づきつつも、シンの放っている話し掛けるなオーラで会話をする事もなく、ただそこらにいるだけの赤の他人としてふるまっていると、指定された時間となり――ピー！と、どこから響いてきた笛の音と共に、二つの建物の間に大きなモニターが現われ、銀色の長髪の少女が映った。

「おはようございます。さて、魔導師試験の受験者二名、揃ってますか？」

『はいっ！』

二人の少女が背筋をピンと伸ばして声を揃えて返事をする。

「あと、推薦採用試験の受験者一名、居ますか？」

「はい」

シンは姿勢を正してモニターの銀髪の少女に向き直る。

「では、確認しますね。時空管理局陸士386部隊に所属のスバル・ナカジマ二等陸士と……」

「はいっ！」

青い髪の元気少女が返事をする。

「ティアナ・ランスター二等陸士」

「はいっ」

続いてオレンジの髪のややキツそうな少女が返事を返す。

「所有している魔導師ランクは、共に陸戦Cランク。本日受験するのは陸戦魔導師Bランクへの昇格試験で、間違いないですね？」

「はい！」

「間違いありません」

ハッキリと答えるスバルとティアナ。ソレを聞いたモニターの銀髪の少女も満足そうに頷く。

「そして、無限書庫司書長補佐官、シン・セレスティア三等空尉」

「はい」

「本日はスクライヤ司書長の推薦と言う形での六課への採用試験の受験、でよろしかったですか？」

「はい。間違い無いありません」

小さく頷いて肯定するシン。

「本日の試験官を務めるのは私、リインフォース？《ツヴァイ》空

曹長です。よろしくですよ〜！」

『よろしくお願いします！』

リインの敬礼に、敬礼を返すスバル、ティアナ。だがシンは無関係とでも言いたいかの如く口を一の字に閉じている。

「セレスティア一等空士の試験はまだもう少し時間がかかるので、先にお二人の方から始めますです」

続いて、スバルとティアナの昇格試験の説明に入る。

「二人は此処からスタートして、各所に設置されたポイントターゲットを破壊」

リインがティアナとスバルに見えるように、ターゲットとなる赤い丸のマークのついたターゲットと妨害用のオートスティア、破壊ターゲットとは逆に青い逆三角のマークの付いたダミーの映像の一部を投影する。

「あ、勿論。破壊しちゃダメなターゲットもありますからね。妨害攻撃に気を付けて、全てのターゲットを破壊。制限時間内にゴールを目指してくださいです。何か質問は？」

「ええつと……」

「ありません」

「ありません！」

先程の説明で理解し切れなかったのかスバルはティアナに視線を送り、ティアナが迷い無く言い切ったのを見て自分も問題ないと力強く答える。

「では、スタートまであと少し。ゴール地点で会いましょう、ですよ♪」

そこでリインとのモニターは切れ、代わりに三つのカウントが表示される。カウントがゼロになり試験のスタートと同時に、二人はそこから駆け出す。

「青髪の方……………バカだな」

《バカね》

二人が駆けて行くのを屋上から眺めながら、シンとファフニールは呟く。しかし暇つぶしに、と二人の試験を見学しようと目の前におそらく試験官が見ているのと同じ映像を回す。

開始早々、二人はティアナのデバイスから放たれたワイヤーで建物の屋上へと上がっていく。その途中でスバルは建物の中へと突っ込み、ティアナはそのままスバルが突っ込んでいったのと同じ建物の屋上に降り立ち、隣の建物の階にいるターゲットに自身のデバイスであるアンカーガンを構える。

建物の中ではスバルがローラーブレードをうまく使ってオートスフィアの攻撃を避けながら難なく対象を潰していき、外から建物の中のターゲット狙うティアナも的を外す事なくターゲットをオレンジの魔力弾が撃ち抜く。

「……………」

《へえ……これはまた。なかなか出来る子達たちみたい》

ティアナとスバルが初めのチェックポイントを難なくクリアし、合流して次のターゲットへと走る。そんな二人が映るモニターに映る二人の腕前にファフニールが砕けた口調で感心する。

シンはそんな自分のデバイスに辛口な評価をつけ加える。

「……確かにコンビネーションは良い。だが、青髪の方は力はあるが無駄な動きが多い。オレンジの方も射撃はいいが分を超えた動きが多い」

《それでも通常の新人と比べれば非常に高いスキルを持ってる。巢立てれば伸びるタイプね》

「……………ふん。アレならこれくらい出来て当たり前だろ。むしろできなくてどうするんだって話になる」

シンはファフニールの言葉に氷の様に冷たい視線をモニターに向けてながらファフニールに対して答える。そんなシンの様子にファフニールは溜息を吐くかの様にコアがゆっくりと一度瞬く。

シンとファフニールはそれ以上互いに言葉を交わす事はなく、モニターに映る二人の奮闘ぶりを観戦する。モニターでは上下で三本のハイウェイが第二チェックポイントの下から一本目を制圧していた。

どうやら二人はティアナのアンカーガンを図に、真上のターゲットを挟み撃ちにするつもりらしい。

《どうやるのか……お手並み拝見》

ターゲットがいる上部にアンカーガンのワイヤーが放たれて天井

に着弾する。シュルシュルとワイヤーが巻き上げられ、ガシャンと天井にぶつかってオートスティア達から一斉射撃の集中砲火を受ける。それと同時にスティアの背後から幻術魔法で姿を隠したスバルが高速で接近し、十分接近して所でその姿が露わになってスティアがスバルに気づいて迎撃を始める。だが更にその向こう側でスバルと同じくティアナが自身の周辺にオレンジ色の魔力スティアを三つと共に現れる。そして、タイミングを合わせて射撃魔法と衝撃砲を放ってオートスティアを全て粉碎する。

《今のは光学迷彩のオプティックハイド》

「幻術か……珍しいスキルを持ってるな」

幻術魔法は理論さえ把握すれば誰にでも使う事ができる様な魔法だが、幻術は規模にもよるが総じて魔力の消費が激しい上に直接的な戦力にはならず、一度でも看破されれば通用しなくなるというメリットよりもデメリットの方が大きな魔法であり、多くの魔導士は使いもしない。だがあえてそれを主体に戦う魔導士もいるが、そのような人たちは総じて魔力保有量が多い。

「ガンナーとしての必須スキル。マルチショットと精密射撃のスキルは持っている、か」

《青髪の子より魔力量は低いけど、魔力コントロールが上手いから無駄なエネルギーの消費が少ないし、射撃型のバトルスタイルも最高の選択だと思うよ？》

「ああ。だが……」

シンのモニターを見る目が鋭くなる。

「詰めが甘いな」

モニターの向こうには、撃ち漏らしたオートスティアの一体がスバルを狙う。ティアナはそれに気づいて直ぐにスバルを跳ね飛ばして反撃に出るが、破棄都市特有の整備されていない道路の瓦礫に躓いて足を捻って倒れこむ。それでも何とか転がって大きな瓦礫を盾にしてスティアの攻撃を回避、その攻撃が一瞬やんだと同時に瓦礫の隙間からオートスティアを狙い撃つ。

「右足首を捻った。もう走れないな」

《おっしいな。もう少しだったのにね》

シンとファフニールの一人と一機は、ティアナがこけた際に誤射した流れ弾によって映像の途絶えたモニターを横目に残念そうに呟く。

「この後はおそらくBランクの大型オートスティアがいるはずだ。まあ手がない訳じゃないが……」

《ないが？》

「その手を使えば……危険行為で減点な上に制限時間ギリギリでゴールする事になる。試験合格は難しいだろうな」

そのままモニターを閉じて、シンはティアナとスバルの試験を観戦する事をやめて目を閉じてしまった。

★ ☆ ★ ☆ ★ ☆ ★ ☆

シンがティアナとスバルの試験の観戦をやめてから約十数分後。
ようやくシンの前に先ほどと同じモニターが開いた。

「おまたせしたです。シン・セレスティア三等空尉」

リインの声を聞いたシンは閉じていた瞼を開き、モニターに映し出されたリインに顔を向け、壁から身体を離して腰に手を当て重心を斜めにずらし、休めの姿勢で耳を傾ける。

「ではこれより古代遺失物管理部機動六課、採用試験を開始します。
でもその前に……」

リインの隣にもう一つモニターが開いて、茶髪のショートヘアの女性が映し出された。その女性の名前は八神はやて。ミッドチルダでは知らない人の方が少ないほど有名な二等空佐。

「八神はやて二等陸佐。君がこれから受ける試験……というか実力審査やけど。その試験先、機動六課部隊長やってます」

「知っています。ユーノ司書長からある程度の情報を受け取りましたので」

淡々と話すシンに、はやてとリインは少し苦笑いする。だがすぐ

に切り替えて試験内容を説明し始める。

「さて、審査の内容ですが、空中の高速移動型のターゲット二十五機を全て破壊して貰います」

「勿論ダミーと時間制限、そして妨害用のオートスティアもありますので気を付けてください」

ティアナ達の時と同じように一部のターゲットのモニターを映し出すリイン。

「今回の試験での実力を元に分隊への配属を設定するから、全力でなくとも本気でやってな」

「それでは、スタートです!」

リイン達とのモニターが切れ、カウントが三つ表示される。

「ファフニール。セット」

《OK, Set up》

眩い純白の光に包まれてシンの灰色のスーツは、騎士服にも見える白を基調とし、蒼いラインが入ったスーツに見える白い防護服へと変わる。
バリアジャケット

三つあるカウントの内、一つ消える。

「モード、ミドル」

《Middle range mode》

銀色の腕輪は黒い宝石を核として白い光に包まれ、その光が弾けた時、シンの両手には白い色の二丁の拳銃が握られていた。

二つ目のカウントが消える。

「行くぞ、ファフニール」

《Yes, Meister》

最後のカウントが消えて試験がスタート。シンは試験がスタートするのと同時に両手の拳銃を前方の空へと向け、引き金を引く。バンバン！炸裂音が響き、純白の魔力弾が高速で飛び、上空を旋回していた三体のターゲットを撃ち落とす。

それを確認したシンはゆっくりと浮かび上がり、第一チェックポイントに向かって飛翔する。

《Wing Shooter, Set》

ファフニールが銃に魔力弾を数発準備する。その直後、シンがターゲットを射程距離に入っただのと同時に、再びファフニールの銃口が火を噴いてターゲットを叩き落とす。が、それに反応したオートスティアが反撃とばかりに光線を放ってくる。

それを右へ左へ下へ上へと身体を捻って接近しながら回避する。そして十分に接近した所でシンは銃口をオートスティアとターゲットに標準する。

「アタック！」

発砲音と共に純白の魔力弾が数発放たれる。放たれた純白の魔力弾は目標のターゲットを撃ち抜く。

《Accel Move》

高速移動魔法を発動してその場から上へと駆ける。と同時に青い閃光が幾つも交錯する。

「ウイングシューター・マルチショット」

自分の周囲に展開させた純白の魔力球を放って、上からダミーのターゲットを避けてオートスティアとターゲットを撃ち落とす。破壊出来たのを確認すると、直ぐに次のポイントへであるハイウェイへ向かって飛行する。

視界の先にハイウェイを捉え、グンツと飛行速度を上げて真下へ一気に急降下していく。その先にあるハイウェイの上には五体のターゲットと妨害用のオートスティアが四体いる。

「フアフニール、クロスだ！」

《Crossrangemode》

両手の白い拳銃は純白の輝きを放って純白の魔力刃を持った双剣へと変わる。

「加速っ……」

《Accel》

落下しながら更に加速してその場から消える程の速度で高速移動し、ダンッ！と音を立ててしゃがんだ体制で地面に降り立つシン。

「カートリッジロード……」

《Load cartridge》

双剣の柄から弾葉が一発排出され、純白の魔力で作られた魔力刃が鋭く強化される。息つく間もなく左手の剣を振り上げてターゲットを切り裂くと、その勢いのまま反転して右手の剣を振り下ろしてもう一体のターゲットを破壊する。

そのまま背を丸め腕を交錯させる。

「ふっ……！」

《Accelerate Move》

短距離を高速移動で通過し、それと同時に交錯させた腕を振り抜いて正面に居たターゲット二体を斬る。更に止まる事無く右側へと振り返り、次の攻撃へと繋げる為にファフニールはカートリッジをロードする。

「切り裂け、斬撃……」

《Selthisu Seib》

回る様に一回転しながら思いっ切り双剣を振り切る。すると、刀身の純白の魔力刃が三日月状に模った斬撃となって飛び、空中に浮かんでいた妨害用のオートスティアを切り裂いて破壊し爆発する。

残ったのはダミーのターゲットのみ。此処までにかかった時間は僅か数十秒程度。

「次だ」

《OK, Meister》

再び空へと舞い上がり、ハイウェイの下へと大きく旋回して潜り込む。だがそれを待っていたかの様に、オートスティアの攻撃がシンを襲う。それを高速回避し、シンは高速で一気にハイウェイの下に居たターゲット三体とオートスティア五体を斬り裂き、そのままハイウェイの下を通り抜ける。

スティアはそれを追おうとするが、あらかじめ放っておいた魔力弾が遅れて飛んで来て、スフィアを後ろから撃ち抜いて破壊する。ソレを僅かに振り返って確認したシンはそのまま次のポイントに向かって飛んで行く。

「次で最後か」

《そうみたい。残ったターゲットの数は四、どれも大型のエネルギー反応を感知。このままハイウェイに沿って移動すればちょうど鉢合わせするわ》

進行方向に四基の大型オートスティアが配置されているのなら、おそらくと推理する事無く待ち伏せであると判断できる。だがシンはそんなものは関係ないとにかくにシンは加速する。

ハイウェイのギリギリを飛んでいる為、足元からは土煙が上がり、位置が空からでもよくわかる。

《Count three, two, one……》

シンの移動に合わせてファフニールが四機のターゲットとの接触までの時間をカウントする。

《Zero》

ファフニールのカウントが終わったと同時にシンは慣性の法則無視して真上に直角に舞い上がる。

直後、青色の光線が幾本も四方を囲うビルから乱れ飛びハイウェイを穴だらけにしてしまう。

「発射された光線からエネルギー値を測定」

《……測定完了。どれもAランクの大型オートスティアで確定》

「やっぱりAか。……あの子狸の仕業か？」

上空に一時離脱したシンは、ビルからは死角になるほど高高度まで上昇し、作戦を練る。

因みに子狸とは八神はやての悪名であり、人に対して使う狸とは狡賢い人の事を云う。が、まだ甘さが残り半人前だという意味で子狸なのだろう。

「チッ……結局全力を一瞬でも出させるつもりだったか」

実力を隠してこの試験を終わらせるのなら一体一体順番に落としていくべきだが、四機いる大型オートスティアは今でこそ攻撃してこないが一旦射程に入れば問答無用で光線を放ち続けてくるだろう。全力を出さなくていいとは言っても、本気でやってくれ。そう言われている以上、この場で出来る事の最良の判断をして切り抜けないければならない。そうなれば必然的にできる手は限られてくる。

全てのオートスティアを一撃で破壊する事。それが一つ一つか、一撃で殲滅かの二つに一つ。

「……殲滅する」

《Yes, Meister》

シンははやての乗る事を腹に決めて下した判断に、ファフニールはただ忠実に応答する。

「だがただ乗せられるのは癪だな……」

《なら……踊って見せる？》

「絶対的な能力差ってやつを見せつけ、それを見極められるかどうかを試す——って言いたいのか？」

《そ。その程度も見抜けない無能ならその程度、今回の任務はキャンセル。逆に見抜けばそれだけの能力があるから任務続行》

「フツ……悪くない！」

シンは宙返りして地上に向かって一気に急降下し、四軒のビルフラチナフールドのちょうど対角線上の中心で停止する。長い金色の髪がシンの動きに合わせて姿勢を整えて双剣を構える。

「三十秒だけ遊んでやる。……よく見てろ」

チラッと視界の端にある桜色のサーチャーに一瞬新背を向けると、不敵な笑みと共に小さくつ呟いた。とほぼ同時に四軒のビルに隠れている大型オートスティアから連続で放たれる青い色の光線の集中砲火が降り注ぐ。

「弾道から四機のスティアの位置を特定。更に砲撃を四発チャージ」

《All right》

ファフニールに指示を出す間、舞い飛ぶ光線をその場で踊る様に回避し、双剣の魔力刃で時折弾くを繰り返す。

正面から飛んで来れば身体を横にして自分に当たる光線だけをファフニールで弾き、横から襲ってくる光線はファフニールで薙ぎ払って身体を捻って紙一重で回避。後ろから襲って来ればしゃがみながら回転して回避し、直ぐに正面に向き直る。

二十秒を過ぎた辺りから四機のスティアの攻撃が激しくなり、まるで豪雨の様に青い色の光線がシンに降り注ぐ。しかし、シンは焦る事はなく先ほどもで踊る様に行っていた回避運動を止め双剣で矢継ぎ早に襲い来る青い色の光線を乱れ斬るかの如く弾き、先ほどとは打って変わって圧倒的なほど速い反射速度と正確な無駄のない剣筋を見せつける。

《弾道から位置特定。ターゲットをロック。いつでも撃てるよ》

「……ファフニール、モードチェンジ、ロングレンジ」

《Long range mode》

双剣は光に包まれ、黒い宝石のコアを中心に先端の尖った白い金属となり、その付け根の部分にトリガーと共にグリップが現れ、黒いコアの魔導師の杖へと変わる。

シンは再び上昇して上空からファフニールを真下め向けて構え、トリガーに手を掛ける。

《Load cartridge》

カートリッジが杖の末端から一発排出され、今度は杖の先端に純白の魔力光が溢れ、渦を描いて魔力がたーじされていく。

眼下のビルに隠れているスフィアは目標を見失って攻撃を停止、更にその場から動く事もしない。

「遊びは……終わりだ。八神はやて」

《Strike Buster, Multi-lock》

ファフニールを通じてシンの瞳にビルに隠れて見えないスティアの位置がカーソルとなって出現する。

「撃ち抜け。ストライク——バスター！」

ガチッとトリガーを引いた瞬間、純白の砲撃が四本、四軒のビルに向かって解き放たれた。

放たれた砲撃はビルの屋上を撃ち抜き、あるいは外壁を打ち破り、内部の大型オートスティアを一寸の狂いなくど真ん中を撃ち貫き、四機が四機とも爆発を起こして無残に消し飛ぶ。

《Nice, shoot》

ブシューッと圧縮された魔力の残滓が蒸気のように杖の金属部のダストから噴出。

シンはフツと鼻で笑うと、ゴールに向かって余裕をもって飛翔する。

★ ☆ ★ ☆ ★ ☆ ★ ☆ ★ ☆

シンの試験がスタートしてすぐ、廃棄都市上空を飛ぶ一機の白いヘリの中。八神はやてと金髪でストリートヘアの末端を黒いリボンで括った女性フェイト・テストロッサ・ハラウン。そして茶髪サイドテールの高間なのはと先ほど試験を受けたスバルとティアナの五人がモニターでシンの試験の様子を見ていた。

因みに、リインはこの試験のゴールで待機している。

「へえ。この子がユーノ君が推薦してくれた子なんだ」

なのはが空を飛ぶシンを見ながら呟いた。

「ユーノ君」本名ユーノ・スクライヤ。シンが補佐する無限書庫の司書長。つまりシンの直属の上司に当たる人物だ。なのは、フェイト、はやての三人とは十年来の付き合いの親友の一人である。

「そや。人材集めに協力してくれたんよ。『僕の所に才能ある子がいるんだけど、推薦しても良いかな?』って」

「そうなんだ」

なのはとフェイトはクスクスと肩を震わせて笑う。

「にしても……彼はデータを見る限りだと、昇格試験は一度しか受けてないんだね」

フェイトは一瞬で真剣な顔になってシンの人物データのモニターを開く。そこには魔導師ランクAランクと表示されていた。

ランクの最低ランクはFだが、シンのは管理局への入局時の審査によるランクであり、訓練校を主席卒業時の評価によって決まるランク以降、全くそういう試験を受けていないのだ。

「Aランクにしては随分強いけど……流石は訓練校を首席卒業しただけはある、かな」

「……せやな」

三人はモニターに映し出されたターゲットを次々と潰して行くシンの姿を見つめる。

両手に持つ銃は一発も外れる事はなく破壊ターゲットだけを的確に撃ち抜き、妨害用のオートスティアも高速移動で翻弄して攻撃される前に破壊している。

「ティア……この人、凄いよ」

後ろの座席に座って、三人と同じ映像を見ていたスバルが呟く。スバルは純粹にただ驚き、その映像に見入っていたが、ティアナは自分とのレベルの差を突き付けられている様な気がしていた。

素早く動くに、妨害用のスティアとターゲットだけを正確に、そして的確に撃つ落とす。今のティアナには出来ない芸当を、自分と殆ど年の変わらないだろう相手が表情一つ変えず平然とやっている様を見て。

「お、スピード上げたな」

はやては飛行速度上げ一気に急降下していくシンを見ながら呟い

た。そして、銃のデバイスを機械的な双剣へと変化させ、更に高速移動魔法を発動し、一気に地面に降り立つと同時に瞬く間にターゲットを破壊する。

『す、凄い……』

「高速移動魔法は一昔前のフェイトちゃんのソニックムーブ並みだよ……」

「剣の使い方、魔力刃の発動タイミング、不意を突いての速攻……どれも高度な戦闘技術ばかりだ」

「これで、ホントにAランクなん？」

ヘリの中でその様子をモニタリングしていた三人はその技術と能力の高さに感心し、はやてに至っては「とんだ掘り出し物やな」と呟っていた。

反応速度や戦闘技術の高さは勿論の事。注目すべきはその能力の異様な高さ。今見ただけでも、AAAはおろか、Sーランクあっても不思議ではない。

「これは、何かあるかな」

なのはがやや含みのある様な言い方で言う。目立った経歴は、訓練校を首席卒業した事ぐらいで、特に実戦を人並み以上にやっつけている訳でもない。彼は卒業してからずっと無限書庫で司書長補佐をしていたが、陰で苛烈な訓練していれば分からなくもない。だがソレを踏まえて考えても、彼の能力の高さは異常だと、なのは、はやて、フェイトの三人は感じていた。

「うん。本人に聞いて話してくれるといいんだけど……」

「まあ、話してくれへんでもユーノくんに聞けばいいんとちゃう？」

元を正せばユーノが彼を推薦し、こうして試験という形で実力を見ているのだから、本人が話さなくてもユーノ本人に聞けばわかるだろうと、はやては思っていた。だが、そのユーノが何も答える事が無いと言う事は、この時三人は思いもなかった。

そして試験は終盤に差し掛かる。

「さて此処はどう切り抜ける？ シン・セレスティア三等空尉」

はやてが意地悪な笑みを浮かべながら、モニターのシンに向かって呟く。

「は、はやてちゃん。何か悪役みたいだよ……？」

「なんか、妙に様になってるけど……」

なのはとフェイトの二人ははやてを見て苦笑いを浮かべながらはやてにツツコミを入れる。

丁度その時、シンは再びデバイスの形態を変え、双剣か杖へと変化させる。

「あれって……レイジングハートのバスターモード？」

「確かに似てるけど……でも全く色が違う」

レイジングハートはピンクだが、シンのデバイスは白や黒といった反対色で彩られている。すると、シンは杖を構え、カートリッジ

を一発消費して杖の先端に純白の光の粒子が集中させていく。

「これって砲撃……？」

「それもなのはと同じ、集束系の圧縮砲撃！」

集束とは、自分の周囲にある魔力素をそのまま魔法に取り込み、使用する技法。そして圧縮とは、魔力を効率良く運用するための魔導師のスキル。

その両方を同時に並行処理するのが、なのはの様な集束砲撃魔導師。だがコレは努力でどうこうはできず、完全に生まれつきの才能によって左右される超高等技能である。

「これは、なのはちゃんのデイベインバスター級の砲撃魔法やな」

はやてはモニターに映るたった一撃で無残に破壊された六機のカジエットの残骸を見て呟く。

スバルとティアナは口を開いたまま啞然として動かない。

「でも、これではつきりしたな」

「うん。シンは、近接のクロスレンジ、中距離のミドルレンジ、遠距離のロングレンジ、どんな距離でもいけるオールラウンド」

「フェイトちゃんと同じ、フロントアタッカー、ガードウィング、センターバック、フルバック、全てのポジションに着けるオールアタッカー、か」

彼なら君たちにとって最高のピースになる。そう言ってシンを推薦してきたユーノの糸をようやく理解した三人。そして、その結論

が出たと程同時に、シンはゴールへと降り立った。

第二話 機動六課

四年ほど前、新暦七十一年 四月二十八日。その日、ミッドチルダ臨海第八空港で大規模な大火災が発生した。原因は分かってはいないが、おそらく不法に密輸入されたロストログアの暴走だと推測されているが、その暴走を引き起した直接の原因は分かっていない。轟々と燃え盛り、あらゆる物を焼き付きし迫る紅蓮の猛威。現地の消防隊も手が出せないほどの業火。そんな中、一組の家族が逃げ遅れ、今にも崩れて来た瓦礫に潰されそうだった。

「お父さん！ お母さんが……お母さんがっ……！」

必死に目の前に横たわる女性を揺さぶりながら水色の髪の少年が、その赤い瞳に涙を溢れさせながら、青白い結界を展開する自分の父へと叫ぶ。

横たわる女性は頭から血を流しており、その顔からは生気が無く、息もしていない。ソレを見た父親は杖のデバイスを血が滲む程に強く握りしめ、歯を食いしばる。

「くっ……流石に、キツい……な」

ガクツと膝を突く父親。かれこれ一時間はこうして自分の子を、妻を守っていたのだが。流石に限界が近づいて来ていた。

「お父さんっ！」

思わず少年が父親を支える様に抱き付く。父はそれを一瞥するが、今は結界を保つ事で精一杯で、ろくに動く事も、息子と会話を交わ

す余裕すらない。

もう駄目か。そう思い始めていた。だが、それは壁を破壊する音と衝撃で吹き飛んだ。

「管理局です！ 生きている人が居たら返事してください！」

そこからは、茶髪のツインテールで白いバリアジャケット防護服を纏った女の子が入って来た。

「おお……高町、か」

「ハーヴェイ教導官！？ 御無事ですか！」

結界へと近づくなのは。だが直ぐにその状況を理解する。すぐさま結界に圧し掛かる瓦礫の山を吹き飛ばそうとするが、それはハーヴェイ教導官に止められた。

「止めろ、高町」

「ですが、コレをどかさないと救助できません！」

「今、コレを吹き飛ばせば、このフロア全体が崩れ落ちる」

なのはは愕然とし、直ぐに愛機のレイジングハートを見やる。

《It is as he says. This district is unusually dangerous conditions now》——彼の言う通りです。現在、この地区は非常に危険な状態です。

辺りをスキャンして、その状態を計算した結果。この瓦礫がこのフロアをギリギリで支えている状態らしい。つまり、ハーヴェイ教導官を助けるために瓦礫を吹き飛ばせば、一気にこのフロアは潰れ自分諸共がれきの下敷きになる。だからと言って瓦礫を吹き飛ばさなければハーヴェイ教導官を助ける事は出来ない。二者択一。

「そ、そんな……っ!？」

なのはは目を見開いた。なぜなら、自分を見つめるハーヴェイ教導官が笑っているのだ。悲しそうに、けれど安心したように。

それを見た瞬間、なのはは理解してしまった。理解したくないのに理解してしまった。ハーヴェイ教導官の思っている事に、その覚悟に。

「頼む。高町なのはは二等空尉」

そう言って、ハーヴェイ教導官は一瞬だけ結界を緩めた。その瞬間、ハーヴェイ教導官は自分の息子を結界の外へと投げる。

慌ててその少年を受け止めたなのはは、直ぐに顔を上げ、ハーヴェイ教導官を見る。彼は満足そうな顔をして、頷いた。

「お父さん！ お父さんっ!!」

必死に少年が叫ぶが、ハーヴェイ教導官は動かない。ただ、息子に向かって一言二言投げかける。

「出来れば、お前の将来をずっと見ていたかったけどさ、どうやら俺たちは……此処までの様だな」

「お父さん！」

「俺たちの分も……アル、お前は生きろ」

「お父さんっ!!」

「行け。高町」

「……………はい」

なのはは齒を食いしぼり、少年を抱えてその場から飛び去る。

「息子を……頼む」

その言葉を最後に背後で勢いよく崩れていく。

連鎖的に崩壊していくフロア付近。崩壊に巻き込まれない様、なのはは全速力で地上まで駆け抜ける。

「嫌だ、お父さあん！ うああああああ!!」

少年の悲しい叫び声は、虚しく紅蓮に染まる夜の空に響き渡った。

それが四年前、なのは達が機動六課を創るきっかけとなった出来事だった。

そして現在。なのはは自分のデスクで、リインと共にシンやスバルとティアナの試験を採点していた。

「……………」

だが、今はその手が止まっている。何かを思いだしている様にぼくっと画面を見つめている。

「どうしたんですか？　なのはさん」

リインが心配そうに声をかけて来て、なのははハツとしたように我に返る。

「ううん、何でもない。ただ……」

「ただ？」

「あの航空火災の時の事を思い出しちゃったかな……」

ソレを聞いて、リインはあつという顔をして俯いた。あの火災で、スバルを助けたなのはだったが。その代わりの様に、自分に戦技教導を教えてくれた教官を失ってしまった。

「すみません……」

「いいよ、別に」

なのははそう言って採点の作業に戻っていった。そう言えばあの子は今どうしているんだろう。そう思いながら。

★ ☆ ★ ☆ ★ ☆ ★ ☆ ★ ☆

シンを始めとした一同、今現在試験の採点をしているのは以外は、管理局施設のオープンルームで採点が終わるまでの間で“機動六課”の事に付いて話していた。

「――とまあ、そんな経緯があつて、八神二佐は新部隊の設立に奔走」

「四年ほど掛かって、やっとスタートを切れた。そう言う訳や」

はやてが作りたいたと思った部隊。災害救助は勿論、犯罪、また、ロストログアの対策を即座に対応する少数精鋭のエキスパート部隊。その部隊が、今説明している機動六課。

「部隊名は、時空管理局本局遺物管理部、機動六課！」

並んで正面のソファーに座るフェイトとはやての間の背もたれに腰かけるリインが元氣よく答える。

「登録は陸士部隊。Forward部隊は陸戦魔導師が主体で、特定遺失物の捜査と保守管理が主な任務や」

「遺失物――ロストログアですね」

「そう」

古代遺失物。通称ロストログア。過去に滅んだ超高度文明から流出する、特に発達した技術や魔法の総称。

そのほとんどは使用方法次第で危険な物になる事が多く、時空管理局が捜査して回収し、管理・保管している。

「でも、広域捜査は一課から五課までが担当するから、ウチは対策専門」

「そうですか」

——ティア、ティア。

——何よ？

はやての話が続く中、スバルがティアナに念話で話しかける。
その事に若干不機嫌そうに応えるティアナ。

——ロストログアってなん……。

——うっさい！ 話し中よ、後にして。

冷たく突っぱねられたスバルは分かりやすく肩を落として落ち込んだ。だが、管理局員として常識とも言える知識を持っていないスバルの自業自得とも言える。

「で、スバル・ナカジマ二等陸士。ティアナ・ランスター二等陸士」

『はい！』

顎の前で軽く指を絡ませて肘をテーブルに付くはやてに、やや緊張気味に返事をする。

「あたしは、二人を機動六課のフォワードとして迎えたいと思っている。厳しい仕事にはなるやろうけど、濃い経験は詰めると思うし。昇進機会も多くなる……どないやろ？」

はやての言葉に戸惑うスバルとティアナ。

いきなりどうだろう、と言われて直ぐに答えられるほど、二人は理解し切れていなかった。そこへ、フェイトが落ち着かせる様に話しかける。

「スバルは高町教導官に魔法戦を直接教われるし。執務官志望のティアナには、私で良ければアドバイスとか、できると思うんだ」

「あ、いえ、そんなとんでもない。と言いますか、恐縮です、と言いますか……」

ますます混乱してしどろもどろになるティアナは、スバルと顔を見合わせる。

その様子を近くの柱に寄り掛かって眺めていたシンは興味なさそうに小さく欠伸をしていたが、ふと白い何かが動くのを視界の端に捉え、その方へ顔を向ける。

「ええっと……取り込み中？」

そこには少し困った様な笑みを浮かべたなのはが立っていた。

はやてが平気だと言うと少しずれて、なのはの座る場所を開ける。そこになのはが座ると、直ぐに試験の評価をはやてに渡す。はやてはそれを暫く眺めた後、シンに向かい合う。

「シン・セレスティア三等空尉」

「はい」

柱に寄りかかっていたシンは金色の髪を揺らしながら壁から背を離し、姿勢を正してはやてに向き直る。

「高町一尉の判断は魔力制御能力、空間認識能力、並行処理能力は問題なしで隊長クラス。そして的確な状況分析と冷静な判断力の高さから、うちの二つある部隊、その両方の援護と支援をする部隊守護——ガーディアンになってもらおうと思います」

ガーディアン
部隊守護の役目は、ポジションに囚われず、また分隊の指示に従う事無く各部隊を援護し、支援する事だ。それにはオールラウンドの戦闘スタイルと、エースクラスの実力が必須となる。

六課の部隊長である八神はやてはシンの底知れぬ潜在能力を先ほどのテストと、なのはから受け取った詳細からその才能を感じとり、こうして任命しているのだ。

「……………」

だがシンは少し考える素振りを見せて黙る。

自分が思っていた以上に八神はやての人の能力を見極める能力が高かったからだ。確かに先ほどの実力審査では本気こそ出したが全力など五割も出していない。なのに彼女は、シンに最も似合った役目を与えてきた。その事にシンは多少なりとも動揺を覚えているのだ。

しかしこれはシンにとっては好都合だった。部隊守護というのは文字通り各部隊の補佐をする役だ。それはつまり限定的な独自行動権が行使できるという事でもあるからだ。

「はい、部隊守護への任命を受諾いたします」

故にシンはこの任命を受け取った。

「これからよろしくね、シン君」

笑顔でそう言い渡すなのはに、シンは無表情に小さく頭を下げてお礼を言う。

なのはは次に、スバルとティアナだけを見て結果を言う。

「二人とも、技術はほぼ問題なし。危険行為や報告不良は身過ごせるレベルを超えています。自分やパートナーの安全だとか、試験のルールが守れない魔導師が、人を守るなんて……出来ないよね」

「……はい」

落ち込んだ様子のティアナ。

「だから残念ながら、二人とも不合格」

やっぱり、という言葉は今にも呟きそうなスバルとティアナ。だが、その気分は次のなのはの言葉で消えた。

「なんだけど、二人の魔力値と能力を考えると、次の試験までの半年間、Cランク扱いにしておくのは帰って危ないかも。と言うのが、私と試験官の共通認識」

「ですう」

「と言う事で、コレ」

テーブルに書類が数枚と二つの封筒が差し出される。

「特別講習に参加する為の申請用紙と推薦状ね。これを持って、本局武装隊で三日間の特別講習を受ければ、四日目に再試験を受けられるから」

「え……え？」

「……あ……え……？」

いまいち状況が呑み込めていない二人を無視して、なのはの説明は続く。

「来週から、本局に厳しい先輩たちに揉まれて、安全とルールをしっかりと学んで来よ？ そうすれば、Bランクなんてきっと楽勝だよ、ね」

『あ、ありがとうございます！』

「合格までは試験に集中してええよ。あたしへの返事は試験が済んでからって事にしようか」

『すみません、恐れ入ります！』

思わず立ち上がって敬礼するスバルとティアナは、お互いの顔を見合せて微笑み合う。その様子を見たフェイト、はやて、なのは、リインの四人も微笑んで見ていた。更にシンも見えていたが、彼は詰まらなそうに溜息を吐く。

★ ☆ ★ ☆ ★ ☆ ★ ☆

アレから直ぐ、スバルとティアナが帰って行った。しかし、シン達はそこから動く事は無く暫しの沈黙の後、はやてがシンに座る様に促す。素直にそれに従って先程スバルとティアナが座っていたソファーへと腰を下ろすシン。

シンが座ったのを確認して、はやてが話し出す。

「さて、じゃ本題と行こうか。Aランクのシン・セレスティア三等空士？」

わざと威圧感を与える様に言うが、シンは特に気にすることなく次の言葉を黙って待つ。

「あれだけの能力や判断能力を持っていて、どうして今まで一度も昇格試験を受けてないの？ ううん、アレ程の実力があるのに、どうしてユーノ君の補佐をしてたのかな？」

「それだけやない。君の経歴からすると、二〜三年ほどしか管理局に在籍してないよな？ それにしては、ちょっと階級が高すぎやない？」

それぞれの疑問を投げかける三人。

シンはただ無表情にそれを見て沈黙している。

「どうや、教えてくれるやろ？」

はやてのその一言に、シンはあからさまに溜息を吐く。
それに若干眉間にしわを寄せる三人。それをしり目に、シンは心底嫌そうな顔で淡々と答えた。

「昇進なんてくだらない。無駄以外の何物でもない」

「昇進が下らない？　どういう意味や」

はやてが少し不機嫌になりながらもそれを押さえてシンに問う。

「言葉通りに受け取って貰って構いません」

それに対してシンは嫌そうな表情を完全に消して無表情で答える。
一瞬で一変した表情の変化に、フェイト少し疑問に思っただけに首を傾げる。

「こんな管理局ところでの昇進なんか何か意味があると言うんです？
オレは“セレスティア”ですよ？　本来ならこんな無能の溜まり場に居るべきではない人間なんですよ」

この言葉には流石にはやてもカチンと来たようで、こめかみに青筋を立てる。間接的に今まで自分のやって来た事を、上の人達を少しでも変える為に自分の今までの努力、それらを全て否定された様に感じたからだ。

そのせいでシンの口にしたキーワードを聞き逃してしまった。

「ソレは自分の考えやろ？　ウチにはウチの想いがあって上を目指し取るんよ。理由もなくそんな事言わんで欲しいな」

「相手の事を考えずにそういう事を言うのはどうかと思うな。皆、夢があるから此処で頑張ってるんだよ？ 昇進はその正当な評価なんだから」

はやてだけでなく、なのはもまた態度にこそ出さないが怒りを覚えていたようだった。だが、なのはとはやての言葉を聞いて、シンはこめかみを一瞬ピクツと振るわせる。

「皆が皆、夢の為に？ 理由も無く？ ——ハッ」

シンは二人の言葉を鼻で笑うと、怒気を含んだ声で言い放った。

「全員が全員、自分達と同じだと思ふなっ」

そこで初めて感情を見せて睨んでくるシンに、なのは達は怯む。自分たちを睨んでくるシンの瞳には『怒り』そして『苛立ち』があった。

怒りはなのは達に向けられた物の様だが苛立ちは別の原因がある様で、ふいっと横を向いてしまった。

「此処には確かに管理局に入りたくて入った人間が居る。だが、中には入りたくなかったのに……」

そこで言葉を切ると、シンは少し間を開けて続けた。

「家族と引き離されて入った人間だっている……」

「……！」

そう言った時のシンの表情を見ていたフェイトは、一瞬。ほんの

一瞬だけシンの表情が曇ったモノに変わったのに気が付いた。

本当に一瞬。集中していないと分からないぐらい一瞬だったが、彼の嫌悪感が出ていた表情が、悲しい表情^{かお}になった事に気が付いた。そして、ソレがフェイトの眼には十年前の自分にとっても似ていると思った。その一瞬の表情の僅かな変化に、九歳の頃の自分の姿が彼に重なって見えていた。

「話はこれで終わりです。では、機動六課の当日に。それでは失礼します」

シンは自分から話を終わらせて立ち上がり、きっちり礼をしてその場から立ち去った。

シンが立ち去って数分。

なのは、はやて、フェイト、リインの四人は今まで出会った事のないタイプのシンに戸惑い黙っていたが、漸くはやてが口を開いた。

「ユーノ君の推薦やなかったらちよつと御断りやな」

「うーん。扱き甲斐はありそうだけど」

なのはの半笑いと言うしか無い笑みを見て、はやては若干頬を引き攣かせた。

「あはは……そりゃ、なのはちゃんやったらそう言うな」

半ば諦めた様に呟くはやて。そんなはやてに「それ、どういう意味？」というの異論の籠った視線をジトッと送るなのは。

その視線を顔を背けて口笛を吹きながらやり過ごすはやて。そしてリインはあわあ言いながら戸惑っている。

「……………」

そんなじゃれ合いの中、フェイトだけは口元に手を当てて考え事をして黙っていた。

黙ったまま考え事をするフェイトをみたリイン、はやて、なのはの三人はお互いの顔を見合わせて首を傾げる。

「フェイトちゃん？」

なのはが呼び掛けて見るが、反応は無し。再び三人は顔を見合わせて、再びなのはが先程より声を大きくして呼び掛ける。

「フェイトちゃん！」

「ふあ？ あ、何？ なのは」

漸く気が付いたフェイトはやや間抜けな音を出してなのは達へと苦笑いしながら向き直る。

「大丈夫？ さっきからなんか上の空だけど」

「何か考え事でもしとったん？」

「あ、うん。大丈夫。ただちょっと気になる事が合って」

「気になる事？」

フェイトはコクリと頷くと、その気になる事を三人に話した。一瞬彼が悲しい表情になった事を、そしてそれが過去の自分と重なった事を。

「一瞬だけ見えた悲しい表情……か」

「そう言えば、家族と引き離されてって言ってたね。アレって、自分の事を言ったのかな……」

はやてとなのはは、先程自分達が言った一言を思いだして罪悪感を感じていた。

管理局に無理矢理入らされたんだろう彼。それが昇進をくだらないと罵る理由。管理局でやりたいなりたい夢が無ければそれに目指して頑張る事もない。

自分たちの軽はずみな発言に、反省している様子の二人にフェイトが話しかける。

「私、あの時の表情を見た時……昔の自分と重なって見えた」

十年前。フェイトがなのはと出会うきっかけとなったジュエルシード事件。その時、母の言われるがまま、母の望むままにジュエルシードを集めていた頃の自分。

ただ笑ってほしかった、笑い掛けて欲しかった母に依存して、自分の意志と言うモノをまるで持っていなかった自分。そんなかつての自分と、先程のシンが全く一緒ではないだろうけど、同じに見えた。

だから――

「私が、彼の“なのは”になってあげたい。あの時、なのはが私たちにくれたように」

そう言って微笑むフェイト。なのはは一瞬寂しそうに顔を俯けたが、直ぐに笑顔で頷き同意する。

「なら、彼の厚生はなのはちゃんに任せるとして……。フェイトちゃんにはシン君の恋人にでもなって貰うか♪」

屈託ない笑顔で言い切るはやてに、フェイトは吹いた。次いであわわしながら反論する。

「な、なんでそうなるの!？　ち、違うよ!　そういう意味じゃないくて!」

首まで赤くなって抗議するフェイト。どうやらこういう事には免疫が無い様だ。

その後も、なのはやリインにまでからかわれてフェイトは遂には黙ってしまい。宥めるのにまた苦労したという。

★ ☆ ★ ☆ ★ ☆ ★ ☆ ★ ☆

はやて達と別れたシンは、重い足取りで無限書庫へ向かって中庭を横切るように歩いていた。

「はあ……鬱だな」

《もう、いきなりネガティブな事を言わないの》

これからの事を思っ
て思わず溜息と共に
出た呟きに、ファフ
ニールが鋭いツツコ
ミを入れる。

何故彼がこのよう
な暗くなっているの
かという、先ほど言
うべきではなかった
台詞を言ってしまった
からだ。それが彼女
たちにとどんな行動
をさせるのか、もし
ユーノから聞いた通
りの人物ならば確
実に自分に何かと干
渉してくるようになる
だろう。シンはそう
思うと溜息を漏らさ
ずにはいらなかった。

「ユーノの推薦の
おかげで、それほど
怪しまれずに機動六
課に潜入出来たのは
良いが……………こ
れからの生活の事を
思うと、溜息の一つ
は吐きたくなる」

《分からなくても
ない、って所かな。
でもやるしか選択肢
はないでしょ？》

「ああ。それが指
令だからな」

親友であるユーノ
の居る無限書庫を除
けば、シンの居場所
など無いに等しい。

「やあ、シン。今
は……………試験の
帰りかな？」

薄い金髪の長髪を
首元で結んだユーノ
・スクライヤ司書長
がシンの背後から現
れた。

「そういうお前は
—————依頼が
済んだから休憩がて
らに外を散歩だな」

《司書長がそんな
呑気で良いの？ お
給料下がっちゃうよ
？》

「二人とも鋭いね。そしてファルは手厳しいね」

苦笑して肩を竦めるユーノ。

「それで？ 二人はこれから無限書庫？」

「ああ」

「なら一緒に行く？ 丁度もう帰ろうとした所だったから」

《司書長を連れて帰らないとみなさん泣きますよ》

「いや、現在進行形で泣いてるだろ」

無限書庫は万年人手不足だ。しかもいつも資料整理と情報検索で常に忙しい。しかもそのやく五分の二を司書長が処理し、更にその五分の三をシンを初めとする無限書庫のメンバーが割り振っているのだ。なのにその司書長が居ないとくれば、もう彼らには泣くしかない残されていないだろう。

「あはは……じゃあ早く戻ろうか。みんな泣いてるだろうし」

無限書庫の忙しさを十年続けてるだけあって、無限書庫の忙しさは身にしみてわかっていているようだ。大体このようにユーノが休憩が取れる事すら極稀なのだ。

「あ、そう言えば今日の試験はどうだった？ まあ聞くまでもなく合格だろうけど」

《試験自体は至って予定通り無事通過。後は多分ユーノさんの想像通りかと》

「あー……やっぱり例の事をつっ込まれたんだ」

「ああ、第一印象は最悪だろうな。まあ、その方が都合がいいからな」

「そっか……シン相手だと、流石のなのは達でも形無しか」

ユーノはそう呟くと少し残念そうに目を細める。

「お前は、ホントにお人好しな奴だな。管理局の人間のくせに」

「局員だからとか、そうじゃないからとか関係ないよ。親友の幸せを祈るのは、親友だからね」

「幸せ、か。オレに幸せなんか無いさ。オレはただ完璧な魔導師として存在している事だけを望まれて、生まれてんだか——」

「それは違う！」

悲しそうに、けれどどこか諦めた様にシンが云うと、それをユーノが否定した。

「シンは……シンが幸せになったらいけないなんて事はないよ」

《そうですよ、マイスター。いくらあなたの出生が特別でも……私のパートナーである限り、幸せにならないのは許さない》

「シンが幸せになれないなんて。僕が……シン・セレスティアの親友であるユーノ・スクライヤが認めない」

《私たちの前でぐらい……心を休めてください。でない………本当に壊れてしまいます》

「……………」

シンは空を見上げて小さく小さく漏らした。

「やっぱりユーノには敵わない……。ま、不思議と嫌な感じはしないから許してやる」

「あ、シン照れてる」

「照れてない」

《マイスターのツンデレ。久しぶりに見ましたね》

「ツンデレじゃない！」

『うんうん。ちゃんと分かってるから』

「全然わかってないだろ貴様らっ!!」

「それじゃ、シンが良い感じにデレた所で無限書庫に戻ろうか」

《そうですね》

「デレてない！　そして人の話を聞け！」

そう言ってシンは、足早に歩き出すユーノといつの間にかユーノの手に渡っていたファルを追い掛ける。

その足取りは先ほどまでとは打って変わって軽かった。

第二話 機動六課（後書き）

今回前半は、サイトの方で乗せていた時、この続編がありました。

その中で登場するオリキャラの一人の過去だと思ってください。

第三話 結集

シンが機動六課に移動が決まってから数日後。四月の時空管理局
古代遺失物管理部機動六課本部隊舎の部隊長オフィス。

そこでは、はやてとリインが自分の机と椅子に座って和んでいた。

「ふふふ。このお部屋も、やあっと隊長室らしくなったですねえ」

お人形サイズの小さなデスクを撫で、これまたお人形サイズの小さなイスに乗りクルクル回りながらハミングを奏でるリイン。

「そやね。それにしても、リインのデスクも丁度いいのが見つかったよかったなあ」

「えへへ。リインにぴったりサイズですう！」

リインは両手を大きく上げて喜ぶ。養成の様な大きさのリインが嬉しさを体全体で表現する様子は見ていても微笑ましく、はやては優しく微笑む。

そこにブザーが鳴り響き、はやてが「どうぞー」と入室を許可する。

『失礼します』

二人の女性の声が聞こえると同時に扉がウィーンと音を鳴らして開き、六課の茶色いブレザー着替えたフェイトとなのはが入ってくる。するとはやては顔を綻ばせて座っていたデスクから立ち上がった。

「お着替え終了やな」

「お二人とも素敵です！」

「にやはは」

「ありがとう、リイン」

リインの賛辞に、はにかみながらも笑顔で礼を云うフェイト。

「三人で同じ制服なんて中学生のとき以来やね。なんや懐かしい」

此処にはいない親友二人と高町家の家族二人を加え、七人で同じ中学校に通っていた。彼女たちは中学校を卒業すると共に、魔導師ではない親友二人と魔力を失った二人を残し、三人で管理局に正式にこっちに移り住んで来たのだ。

中学校を卒業してかれこれ四〇五年。これまで一度も同じ制服に腕を通した事は研修時代ぐらいだった。だが全員で同じ部隊に入り、また同じ制服を着るといふ夢の一つを今この瞬間に叶えたのだ。感慨深いのだろう。

「まあ、なのはちゃんは跳んだろ跳ねたりしやすい、教導隊制服でいる時間の方が長くなるかもしれへんけど」

「まあ、事務仕事や正式の場では、こっちって事で♪」

ややおちゃめに云ったなのはに、はやてとリインは微笑む。

「さて、それでは」

「うん」

フェイトとなのはは頷き合い、ビシッと姿勢を正して敬礼する。

「本日只今より、高町なのは一等空尉」

「フェイト・テストロッサ・ハラOWN執務官」

「両名共、機動六課へ出向となります」

はやてとリインも二人と同じように敬礼して挨拶を返す。

「どうぞ、よろしくお願いします」

そうして微笑みあう四人。

そこに再びブザーが鳴る。

「どうぞー」

「失礼します」

はやての入室許可を聞くと同時に扉が開き、軽く会釈をしながらグレーの髪をし眼鏡をかけた青年が入ってくる。

「あ。高町一等空尉、テストロッサ・ハラOWN執務官。ご無沙汰してしております」

青年がビシッ！という擬音が聞こえてきそうな敬礼をして挨拶するが、肝心のフェイトとなのはの頭の上にはクエスチョンマークが浮かんでいる。

その様子を見た青年が若干不安そうに、もしかしたら覚えていないのだろうか……といった風に表情を崩すと、フェイトとなのはおずおずと切り出した。

「ええっと……」

「もしかしてグリフィス君？」

「はい。グリフィス・ローランです」

自分の事を覚えていてくれた事に安堵した青年――グリフィスははっきりと答えた。

「うわぁ、久し振り！　ていうかすごおい！　すごい成長してるゝ
！」

「うん。前見たときはこんなに小さかったのに」

「そ、その節は色々お世話になりました」

フェイトも大袈裟なぐらいはしゃぐのはに同意して、フェイトは当時のグリフィスの大きさを胸元に手のひらを置いて示してみせ、グリフィスは恥ずかしさをなんとか押し隠しながら応える。

「グリフィスも、ここ部隊員なの？」

「はい」

フェイトの質問に一つ返事で肯定するグリフィス。

「私の副官で、交代部隊の責任者や」

「運営関係も色々と手伝ってもらってるです」

グリフィスの役目と仕事を軽くはやてとリインが紹介する。

「お母さん——レティ提督はお元気？」

「はい。お陰様で。——っと、報告してもよろしいでしょうか？」

優しそうな笑みを浮かべて答えたグリフィスは、直ぐに仕事の顔に戻りはやてに伺う。

「ん、どうぞ」

「フォワード四名を始め、機動六課部隊員とスタッフ、全員揃いました。今はロビーに集合、待機させてあります」

「そうか、結構早かったなあ。あ、ちゃんとあの子は来てる？」

“あの子”という表現に心当たりがあるフェイトとなのはは、一瞬真剣になるも——

「はい。誰よりも早くロビーに待機していました」

グリフィスの報告に、はやてと共に「おお……」と感嘆の息を漏らした。

「ほんなら、なのはちゃん、フェイトちゃん。まずは部隊のみんなに御挨拶や」

『うん』

二人は頷くと、グリフィスに続いてオフィスを後にする。

ロビーには六課の部隊員、バックヤードメンバー全員が勢ぞろいして六課代表たちの挨拶を待っていた。

勿論そこにはシンの姿もある。だが一人だけでロビーの壁に背を付けて両手はポケットに突っ込み、背は壁に付けたままという無礼極まりない態度ではあるが。

その光景を遠目にそれを見たフェイト、なのは、はやての三人は僅かに苦笑い。そしてユーノの「口も悪いが、態度はもっと悪い」という言葉を思い出して諦めた溜息を周囲の人間にばれないように小さく息を吐いた。

「機動六課課長。そして、この本部隊舎の総部隊長、八神はやてです」

そんなシンの態度は置いておいて、やって来たはやて達が見えやすいように台座に上がって挨拶が始まり、待ち侘びたというかのように拍手が起きる。勿論シンはそんな事はせず只見ているだけ。

「平和と法の守護者。時空管理局の部隊として事件へ立ち向かい、人々を守っていく事が私たちの使命であり成すべき事です」

整列する機動六課スタッフ、本部隊で最年少の赤髪の少年と桃色の髪の少女、隊舎の掃除や部隊員の食事を担当するサポートチーム、そして八神はやてが部隊長を務める後方支援隊のロングアーチスタ

ツフ、そしてスターズ隊のスバルとティアナを初めとする年若な新人。各分野の機動六課の部隊員を見渡していくはやて。

「実績と実力に溢れた指揮官陣。若く可能性にあふれたフォワード陣。それぞれ専門技術の持ち主のメカニックやバックヤードスタッフ。全員が一丸となって事件へ立ち向かっていけると信じてます」

話に一区切りつくとはやてはいつものおちゃめな笑顔を浮かべて部隊長挨拶を終わらせる。

「まあ長い挨拶は嫌われるんで、以上ここまで。機動六課課長及び部隊長、八神はやてでした」

手を上げて挨拶を終えると、シン以外のスタッフたちから拍手が巻き起こる。思ったよりも好評な挨拶だったようだ。

ロビーでのあいさつが終わって、フォワード四名となのはは訓練場へと向かって移動していた。その途中で、なのはが思い出したように振り返ってフォワードの四名に話しかける。

「そう言えば……。お互いの自己紹介はもう済んだ？」

「名前と経験やスキルの確認はしました」

とティアナが答え、

「後部隊分けとコールサインもです」

次にフェイトが保護責任者の秘蔵っ子。赤髪と赤眼が特徴の少年、エリオ・モンディアルが答える。歳は十歳と若い、魔導師ランクは既にBランクを取得している。

そしてエリオの隣には、桃髪ショートヘアの少女、キャロ・ル・ルシエ。同じくフェイトの秘蔵っ子で、竜召喚という希少能力レアスキルの持ち主だ。

「そ。じゃ訓練に入りたいんだけど……良いかな？」

『はいっ』

四人は声を揃えて返事をする。が、ティアナがある事に気が付いた。

「あ、あの……もう一人はいないんです？」

もう一人とは、試験の時に合格した人——つまりシンの事だ。ロビーでは触れたら切れるナイフのような雰囲気、声は掛けられなかったが、見かけていたのでこの場に居ない事を不思議に思っていたのだ。

「あゝ……ええつとゝ……」

困った様に視線を逸らし苦笑いしながら唸るのは、四人は不思議そうに首を傾げる。

「なんて言うか……逃げられた？」

★ ☆ ★ ☆ ★ ☆ ★ ☆

バラバラバラバラ！と騒音を響かせる六課の屋上にあるヘリポート。シンはそこにいた。ただし、訓練など誰がするか、と言わんばかりに寝転がって空を見上げているのだが。

「なあ、お前は訓練に行かねえのか？　なのはさん教導を受けられる機会はそうそうないんだぜ？」

そうやって来たのは黒髪の男性、ヴァイス・グランセニック。階級は陸曹で、六課のヘリパイロット。ストームレイダーというインテリジェントデバイスを相棒に持っている魔力持ちだ。

「自分よりも劣っている人間に教わる事など、何もありませんですから」

そう言ってヴァイスに背を向けるシン。それを見てヴァイスは溜息を吐く。

「新人たちに追い抜かれてもしらねえぞ？」

「抜けられるものなら抜いてみせて欲しいですね。それに、正確にはフォワードじゃないですから」

シンはフォワード部隊扱いではない。正確にはライトニング分隊、スターズ分隊。どちらにも属さず、戦闘に参加するたった一人の部隊^ガ守護だ。

その役目はポジションに囚われず、また分隊の指示に従う事なく

各部隊を援護する事。それには高い実力が必要になり、高い実力がある故に訓練は完全に自主参加となる。

「ヴァイス君！　もう準備出来たんか？」

シンとヴァイスがそんな風に話していると、はやて、フェイト、リインの三人がヘリポートへとはいつて来た。

「準備万端！　いつでも出れますぜえ？」

「もしかしてお待たせしてもうた？」

「いやいや。そんなこたあないですぜ八神隊長。暇つぶし相手もいましたしねえ」

「暇つぶし？」

アレアレつと、ヘリポートの縁を指差すヴァイス。三人がヴァイスの示す先に視線を向けて見ると、シンがこちらに背を向けて寝転がっていた。それを見てやっぱり出て来たのは苦笑이었다。

「サボるだろう、とは思ってたけど……」

「まさかいきなりサボタージュとは思わなかったなあ……」

「でもフォワードではないですし、実際に今のフォワード陣とじゃ、実力は天と地の差ですしい……」

「そりゃまた、凄い奴を引き入れちゃいましたね」

シンは聞こえているのかいないのか、反応する事無く只その場に寝転んで空を見上げる。

そんなシンにフェイトが近づき、ヘリのプロペラが巻き起こす強風に髪を押さえながら話しかける。

「シンは、皆と訓練しないの？」

「あの程度のレベルと訓練した所で得る物もないですし非効率すぎます。そんな無駄な事をするぐらいならイメージトレーニングした方が効率的です」

「じゃ、今はイメージトレーニング中？」

「はい。別に邪魔とは言いませんが目ざわりではありません」

シンはフェイトと目を合わせようとせず、邪魔だとハッキリきっぱり言い切る。

「これから用事があるんでしょう？ だったら早く行ったらどうですか？ 貴女達にとって昇進は大切な事なんじゃない？ だったら俺なんかと話してる暇はないと思うんですが違いますか？ テスタロッサ・ハラオウン執務官」

有無を言わず丁寧に意外と失礼で正論を息継ぎ無しで言ってるシン。その殆ど息継ぎ無し of 早口な台詞に圧倒される一同。

口が悪いとはこういう事か、と改めて思い知ったフェイト達は軽く談笑してからヘリに乗り込み、飛び立って行った。

『行ってくるね、シン。訓練行くだけちゃんと行くんだよ？』

というフェイトの念話を残して。

しかしシンはそんな事は些細な事と、意識を集中し始める。

——データセットアップ終了。イメージワールド生成完了。

地上より遙か上空の仮想空間の中、空を漂う雲よりもやや高い位置で騎士の服にも似た防護服を纏い、ミドルレンジモードの白い二丁の拳銃持ったシンが静かに浮かんでいた。

シンの居る空の更に上からファフニールの声が響く。

——撃破対象、武装局員。魔導師ランクA、二十人。

シンの四方を囲う様に二十人の武装魔導師が出現する。

——更に魔導師ランクAA、数は五人。

更に五人の魔導師がバラけて出現する。

——射撃型オートスティア、射撃制度威力共にAAA、十五体。

魔導師の向こう側に十五個の機械球——オートスティアがセットされる。

——更にガジェット・ドローン？型、同じく？型、二十機でランダム設置。

魔導師の中に、縦型の蒼い機械ガジェット？型が十二機、更に全翼機のような形状をしてる航空型のガジェット？型が八機現われる。

——ターゲット設置完了。

準備が整った事を伝えると、漸くシンが口を開いた。

「目標、五分で四分の一以下まで撃墜、及び被弾無し。デバイスサポートなし、デバイスリミッターあり」

――五分で総数六十機を十五機以下。被弾無しでサポート、オフ。及びデバイスリミッター、オン。

シンがファフニールを構えると同時に六十のターゲットが一斉に散開し始める。

――Image training……Start!

ファフニールの開始の声と共にオートスティアから一斉に蒼い閃光がシンへと放たれる。シンはそれを全て紙一重で避けると、両腕を交差させる。

「ウィングシューター。アタック」

斜め一直線に放たれた純白の魔力弾は、十五機のオートスティアの内の二機を的確に撃ち落とす。更に少し身体を後ろにずらして横を向き、再び魔力弾を発射して二機のカジエット?型を落とす。

「……!」

息つく間もなく四人ほどの魔導師が杖を片手に四方から突っ込ん
で来る事に気付く。

杖の先には魔力球が生成されていて至近距離で撃とうとしている。

「ウイングシューター・マルチショット。位置補正……目標捕捉……」

シンは自分の周囲に純白の魔力球を八つ生成し、身体を捻って四人から放たれた魔力弾を難なく回避する。

それと同時に並行して先程生成された八つ純白の魔力球が二発ずつ微動して四人の魔導師に狙いを付ける。

「……アタック」

シンの掛け声で八発の魔力弾が放たれて四人の魔導師に命中して爆煙を上げて吹き飛び、データとなって消える。
そのまま敵陣へ銃を向けて速攻を仕掛ける。

「カートリッジロード」

二丁の拳銃から二発のカートリッジが排出され、二つの銃口に純白の魔力光が収束される。

「ストライク・ツインバスター！」

収束された魔力が一瞬圧縮され、一気に解放されて純白の閃光を二発放つ。放たれた砲撃は数人の魔導師と数機のカジエツトを巻き込んで爆発。だがシンは発射の余韻に浸る暇もなく次の行動に出る。

「クロスレンジ……」

二丁の銃は機械的な双剣へと変わる。更にそれぞれ一発のカートリッジを排出して双剣に純白の魔力刃が発生する。

「アクセルッ」

瞬間高速移動魔法を発動させて一気に真反対の方向へとする肉迫して、双剣を振り被る。

「セルティススラッシュ！」

純白の魔力刃を宿す双剣が勢いよく振り下ろされて二人の魔導師が真っ二つされ粒子となって消える。

更にそれに畳み掛けて舞う様に進みながら双剣を振るって魔導師とガジェットを切り裂いていく。が、その途中でオートスティアからの射撃攻撃が注ぎ込まれ、一旦その場を離れる。

（やはりANF相手に魔力刃は長く持たない。直ぐANFで籠めた魔力を削られて威力が落ちる）

後ろ向きで後退するシンの背後に航空型のガジェット？型が四機回り込む。

（なら……）

シンはそのまま加速し、激突する寸前で宙返りして右手の双剣を真っ直ぐ降ろして向かってくるガジェットを頭から両断する。更に身体を横に捻って左手の双剣を水平に振り下ろして通り過ぎるガジェットを引き裂く。

（より強い魔力で再構築し、AMFを強制解除すればいいだけだ）

反転宙返りから、向かってくる残り二機のガジェットを正面に捉え、双剣を大きく交差させる。思いつ切り×字に振りきってすり抜

け、双剣に切り裂かれたガジェットは粒子となって消える。

その勢いのまま大きくUターン。近くの魔導師に肉迫すると同時に再びカートリッジを排出して魔力刃をチャージする。

「セルティス……セイバー！」

思いつ切り振るって純白の魔力刃を斬撃と共に放つ。斬撃で魔導師は粒子となって消え、更に放たれた魔力刃がその後方に居たオートスティアからとガジェット？型と？型を五・六機巻き込んで爆発する。

——残り時間、後一分。

空からファフニールの声が響き、残り時間を知らせてくる。シンはそれを聞いて舌打ちする。

ここまでまだ半分の三十体ほどしか倒せていない。後残り約一分でもう十五体のターゲットを撃墜するのは流石に厳しい。

しかし——

「三十秒以上あるなら……！」

デバイスはロングレンジモードの魔導師の杖へと形態を変え、杖の先を敵の中心点に向けて構える。

「スターダストブレイカー……クイックチャージ」

杖の先に急速に純白の魔力が彗星の如く集束されていく。収束され続ける魔力は純白の光球となって杖の先で大きくなっていく。

——Count, five, fore……

集束を終え、光球を一瞬で圧縮させる。だが、同時にFNのカウントダウンが始める。

「バーストモード！」

三つの環状魔法陣が光球に取り巻いて、光球の輝きが増していく。

——Three……

弾ける様に前方へと純白の集束砲が光球のまま放たれる。

——Two……

放たれた純白の光球は敵陣のど真ん中へと撃ち込まれ、

——One……

弾けて放射状に光の爆発が広がって残ったターゲットを呑み込んでいく。

——Zero. Crash training

その声と共に世界がいきなり真っ黒に塗りつぶされた。

「くはッ！」

息を一気に吐いて荒く呼吸するシン。だが直ぐに呼吸を整えて深呼吸一つすると、静かに身体を起こして立ち上がる。

「……今回の点数は？」

《撃墜対象六十体の内42体を撃墜。結果はタイムオーバーで目標達ならず、でも被弾は無しだから……55点って所ね》

かなり辛口評価を伝えるファフニールだが、シンも予想していたのかそれほどショックな様子はなく、腰に手を当てて溜息を吐いた。

「五分でスキルを使わずリミッターありでファフニールのサポート無しなら……まあこんなものか」

《でも一応目標をかすってるから、空間把握と魔法処理と並行処理速度を上げれば目標は達せられる》

「ああ。もう少し並行処理マルチタスクを中心に魔法を使っていくか」

《そうしましょう》

ファフニールとの会話を終えると、視線を海上に大きく突き出た訓練場へと向ける。そこでは今、FWの四人と教導官の高町なのが訓練している。

訓練場には陸戦用の訓練シュミレーターを積んでおり、実体を持つ立体映像として投影する事が出来、触れる事も、壊す事も出来るが、勿論勢い良くぶつかればそれ相応に痛い思いをする事になる。

視線の先では投影された数機のカジエットが飛び回り、それぞれがAMFに対抗した攻撃方法で破壊して行くのが見える。その様子を見てシンは何を思う訳でもなく、訓練場に背を向けて歩き出す。

「……ハッキング適当に情報収取しとくか、ファル」

《はい》

そのままシンは屋上を後にし、機動六課中を練り歩き、六課の敷地の見取り図を頭の中に叩き込み、更に六課のデータベースの攻略の足掛かりとしてマーキングというプロテクト解析のウイルスを忍び込ませた。

★ ☆ ★ ☆ ★ ☆ ★ ☆ ★ ☆

その夜。六課の隊舎に戻って来たフェイトは、同室の寝間着姿なのはと今日の事の報告をたわいのない話と共に行っていた。

「新人たち、手ごたえはどう？」

「うん。みんな元気で良い感じ。まあ若干一名ほど来なかった子はいるけどね」

と苦笑いしてなのはが言うと、フェイトもまた苦笑した。

「一応、屋上にいたシンに声は掛けただけど……そっか、やっぱり行かなかったんだ」

フェイトは制服の上着をハンガーに引っ掛けて照明に掛ける。

「あれ？ シン君に会ってたの？」

「うん。今日、中央管理局へ行く前にヘリポートでね」

「へえ……で？」

「で？ って、それだけだよ？」

なのはが次の言葉を待っていると、フェイトはキョトンとして答え、
なのははガクツと肩を落とした。

「声をかけて、どうしたのって事」

と、なのはがやや呆れたように付け足すと、フェイトは「ああ……」と理解し、答えた。

「新人達と訓練するぐらいなら、イメージトレーニングした方が効率が良い……って言ってたよ」

「確かに、彼の公式になってないあの実力なら分からなくてもないけど……」

データにはない試験の時に明らかになったシンの飛び抜けた実力と能力。そのどれもがFWの誰よりも、いや下手したら隊長陣よりも上かもしれないそのまだ隠された力を考えれば理解できなくもない。だが、それはあくまでも個人の能力でしか無く、チームプレイをよしとするなのは達からしたら、個人プレイをするシンに対してチームプレイをしてほしいと思っている。

個人の力がどれほど大きかろうと、いくら一対多の戦い方に慣れているとしても、一丸となって向かってくる相手には弱い。それが

なのはを始めとする起動六課の隊長達の総意である。

「でもまあ……」

「？」

話しを切り替えたなのはに、フェイトは首を傾げる。

「シン君とフェイトちゃん。お互いに引き合うなんて運命感じるよね♪」

「うえ！？　な、何言ってるのなのは！」

突如なのはの発した言葉に間拔けな声を漏らしたフェイトは真っ赤になりながらアワアワと慌て始め、そんなフェイト対してニヤニヤとするなのは。

「だって初めて会った気がしないんでしょう？」

「そ、それはそうなんだけど……！」

フェイトは以前、なのは達にシンと初めて会った様な感じがしないのだと打ち明けていた。まるでずっと昔に一度会った事がある様な懐かしい感覚だったと。

「だからきつと運命なんだよフェイトちゃん」

「う、運命……？」

「そう。お仕事ばかりのフェイトちゃんの運命の赤い糸で結ばれ

た人なんだよ、シン君は」

いわゆる生まれる前から決まっている恋人、あるいは一生愛し続ける相手なのだとフェイトに捲し立てるなのは。だが、それはなのはにも言える事ではある。

「仕事ばかりって……そ、それならなのはだって！　ここ数か月、殆ど休み取ってないよね！」

「う……それを言われると」

「はやては仕方ないけど。地球に戻ったの、もう半年も前だよね？　みんな心配してるよ？」

「うゝ。でもフェイトちゃんには言われたくないよ。フェイトちゃんだって私以上に働いてるのにゝ！」

「私はちゃんと、一か月に一度は帰ってるから」

それが日帰りである事は言わない。

「……近い内に一度帰ります」

「よろしい」

「……………」

「……………ぷっ」

「……………ふふ」

なのはが可愛らしく吹き出し、それに釣られてフェイトも笑い出す。

「あははは！」

「ふふふふ！」

六課の隊舎の一室で沸き起こる楽しそうな笑い声。そんな、機動六課が始動して最初の夜だった。

第四話 ファースト・アラート

ピーー！

訓練場に甲高い笛の音が響き、次いで空中に居るのはから集合の指示が掛かる。

「はーい、せいれーっ！」

その号令にフォワードの四人が息を切らせながら走って集まって来た。その訓練着は砂埃でボロボロに見えるぐらいに汚れている。それだけなのはの教導がいかに厳しい訓練であるかを物語っている。

「じゃあ、本日の早朝訓練ラスト一本。シューティングバージョン弾丸回避訓練をやるよ。レイジングハート」

《All right. Accel Shooter》

なのはの足下に桜色の円状のミッド式魔法陣が展開され、その周囲に桜色の光球が幾つも生成され、ぐるぐるとなのはを中心360°回り始める。

「私の攻撃を五分間、被弾なしで凌ぎ切るか、クリーンヒットを入れればクリア。ただし、誰か一人でも被弾したら最初からやり直しだよ。頑張っていこう！」

『はい！！』

四人は返事をしたすぐ後にどう切り抜けるかを相談し合う。

「このボロボロ状態でなのはさんの攻撃を五分間……捌き切る自信ある？」

「ない」

「同じくです」

スバルとエリオが無理だとハッキリ断言する。

「じゃ、なんとか一発入れよう」

「はい！」

「よし、行くよエリオ！」

「はい、スバルさん！」

スバルとエリオが、それぞれ右手のみの鉄拳型と蒼い槍型のアームドデバイス、非人格型のリボルバーナックルと人格型のストライダを構える。

「準備はOKだね？ それじゃ、レディ……」

なのはは右手を上げて生成した桜色の魔力弾の幾つかを寄せ――

「ゴー！」

「全員、絶対回避！ 二分以内に決めるわよッ！」

『おう！』

「はい！」

なのはが右腕を振り下ろした瞬間、ティアナが指示を出してその場からすぐさま散開する。放たれたなのはの魔力弾を避け、四人の居た位置で爆発が起きる。

「……！」

フォワード陣からの初手の攻撃を待っていたなのはの背後に一筋の青い道——ウイングロード——が高速で展開される。

振り向けばそこにはウイングロードを疾走するスバルの姿がある。しかもその反対側からのビルの内部からは、なのはを狙っているティアナの姿が。

「アクセルッ」

《Snipe Shot》

なのはは即座に周りに残っていた二発の魔力弾を加速させ、ウイングロードのスバルとティアナへと向かって放つ。しかし、放った魔力球は二人を貫通し、オレンジ色の魔力光と共に二人の姿が消える。ティアナが得意とするフェイク・シルエットだ。

魔力をかなり消費するが、自分だけでなく色々な幻影を創り出す事が出来るそれなりに高度な魔法である。

「シルエット……やるねティアナ」

と感心するなのはだったが、その頭上からティアナのフェイク・シルエットで姿を隠して接近していたスバルが、背後のウィングロードから思いっ切り拳を振り下ろす。

「でええりやああああ!!」

が、なのはは冷静に円状のミッド式の魔法陣の桜色のシールドを張ってスバルの拳を受け止める。

「く……うう……!!」

「……………」

なのはが目を細めて先程放った二発の魔力弾の方向を180度反転させてスバルに向かって挟み撃ちで飛ばす。

「ッ!？」

直ぐにそれに反応したスバルはローラーを逆に回転させ、後ろへ後退して緊急回避を行う。

「うん。良い反応」

スバルはローラーから火花を上げながらウィングロードを滑って、迫りくる二発の魔力弾から逃げる。

——スバル馬鹿! 危ないでしょ!

——ごめん!

——待ってなさい。今撃ち落とすから。

建物の中に隠れていたティアナがデバイスを構える。非人格型の銃型ストレンジデバイス、アンカーガンの銃口に魔力球が形成されていく。

その目標はスバルを追っている二発の魔力弾に狙いを定め、トリガーを引く。

バスンッ！

「い！？」

が、魔力弾発射されずに不発。どうやらデバイスが限界に近く、作動不良を起こしたようだ。

「この肝心な時に！」

上下二連中折れ式拳銃の銃身から二発のカートリッジを抜き取り、新しいカートリッジを二発装填して再びスバルを追う魔力弾に狙いを定める。

魔力をチャージした銃から四発のオレンジ色の魔力弾が放たれ、二発はスバルを追う魔力弾へ、もう二発はなのはへの牽制へ向かう。それを確認したスバルは飛び跳ねて追ってくる魔力弾を回避し、再びなのはへと向かって移動。

なのははその一連の動作を一つも見逃す事無く見つめ、小さく微笑む。

（うん。流石は長年コンビ組んできただけあってスバルとティアナはコンビネーションは問題なし）

なのはは個人で向かってくるような事は絶対にせず、それぞれの欠点をそれぞれで補って攻めてくるスバルとティアナのコンビネーションを褒める。だが、その思考は次の瞬間消し飛ばされる事となる。

《The attack comes from the back》――後ろから攻撃が来ます――

「ッ！」

なのはが後ろを振り向くと、その視界から何かが晒しその視界の死角へと移動する。更にそれを追って振り返るがまた死角へと移動されて捕捉できない。

（エリオ？ ううん、違う。これは……）

《Acceler Shooter》

なのはは自分の周りに幾つか魔力弾を発生させ、それを自分の死角へと放つ。何にも当たる事は無かったが、その代わり移動する正体が分かった。

（そうか……まさかこんな時に飛び入り参加されるとは思わなかったなあ）

その移動する物体は純白の魔力光で生成された誘導型の魔力弾。この六課の中で純白の魔力光を持つ人は一人しかいない。

「魔力弾だけでデバイスも展開してないって事は、別に全面参加する訳じゃないって言いたいのかな？」

と呟いてなのはは訓練が行われている位置から少し離れた訓練場のビルの上へと視線を向ける。そこには柵に体重を掛けて金色の長髪を風に靡かせて立つシンの姿があった。

その姿は六課の制服のままバリアジャケットで防護服を着ている訳でもなく、ましてやファフニールを展開すらもしていない。いや、それ以前に訓練に参加するような位置に彼は立っていない。

《どうやらここに気付いたみたいよ》

「仮にも管理局エースって呼ばれてるんだ。気付いて当たり前だな」
クイクイツと翳した右手の指を細かく動かし、一発だけの魔力弾を細かく操作する。

「これからAMF状況下での戦闘が増えるんだ。適度に馴らしておきたい所だし……」

正式名称Anti-Magilink-Field——アンチ・マギリンク・フィールド。通称AMF。

通常魔法を使うには、魔法を使う際の源となる力——魔力を必要とする。体力と同種の物で、例えば使う程減少してしまう。

そしてその魔力を作り出すのが、魔導師の第二の心臓とも言われるリンカーコアだ。周囲に普遍的に存在する魔力の素を、リンカーコアを通じて体内に取り込む事で、魔力素同士を結合させて魔力として使う事が出来る。

そしてAMFは、その魔力を魔法として使う時の魔力結合——術式構成——を阻害するジャマーフィールドの事だ。AMF濃度が増すば増す程、魔力結合が解除されるまでの時間は短縮され、結合はどんどん難しくなるという特徴を持っている。

「たまには弾丸制御シュートコントロールのもいいか」

と呟いて目を閉じ、魔力弾の操作に集中する。その瞬間、なのはの目の前で純白の魔力弾が二、三度機敏に動いて一気に加速する。

「っ！ アクセルッ」

なのはも負けじと二発ほど加速させて純白の魔力弾の正面から攻める。だがシンの魔力弾は直線的に回避コースを減速無しで通り抜ける。

（抜かれた！？）

なのはの魔力弾は誘導型だ。直射型の魔力弾なら速度さえ見切れば回避する事は可能だ。だが誘導型は魔力弾を相殺する目的で撃てば止められる弾丸。その誘導型の魔力弾の軌道を読んで完璧な回避コースを見出し、更にそれを忠実に行う事は、相手のレベルにもよるがなのはでも針の穴に糸を通す程難しい。

しかし、シンの魔力弾にばかり集中してられない。ティアナの魔力弾もなのはを狙ってくる。なのははシンの魔力弾に注意しながらそれを身体を逸らして避ける。

「我が乞うは、疾風の翼。若き槍騎士に、駆け抜ける力を」

《Boost up Acceleration》

だがその頃、地上ではキャロがエリオに機動力を強化する補助魔法をかけていた。

キャロの補助魔法を受けてエリオのベルカ式魔法陣が強く輝く。

ストラーダの噴射口から黄色い魔力をロケットの様に噴射してアイドリリングする。

「あの……かなり加速がついちやうから、気を付けて」

「大丈夫！ スピードだけが取り柄だから。行くよ、ストライダー」

その声に応える様に更に強く魔力を噴出する。

なのははシンの魔力弾を追って自分の魔力弾を加速させる。だがシンの魔力弾より一層早く加速してなのはの魔力弾を翻弄すると一気に上空へと昇って行く。それを追ってなのはが顔を上げると、頭上からフリードが迫っていた。

「キュク！」

フリードは口から火炎弾を二発放つ。なのはそれを飛び跳ねる様に避けて、下へ向かうが直後にシンの魔力弾が側面から強襲してくる。

「……！」

だがシンの魔力弾はなのはに接近すると同時に弾け、細かい礫となつてなのはに降り注ぐ。しかしなのはも魔力弾が弾けると同時にバリアを展開して防御する。

「エリオ！ 今！」

「いっけえええ！」

《Sperangriff》

ストラーダの鎗の穂から魔力をロケットの様に噴射して一気に勢いよく空中へと撃ち上がるエリオ。その先に居るシンの魔力弾の所為でその場から動けないのはへ突進。なのははそれを一瞥し、衝突の瞬間、微笑を浮かべる。

エリオが衝突すると同時に爆発が起こり、エリオが弾き飛ばされる。

「うああああ!？」

爆発に煽られて吹き飛ばされながらも、エリオは体制を整えて建物の縁へ無事に着地するが勢いが止まらずそのまま縁から落ちかけ、なんとか右手で縁を掴んで落下するのを止める。

「外れた？」

ティアナが煙漂う空間を凝視する。直ぐに風で煙が晴れ、中から無傷のなのが出てくる。

《Mission complete》

「お見事。ミッションコンプリート」

「本当ですか!？」

ビルにぶら下がりながらエリオが言う。半信半疑なフォワード陣に、なのはは自分の肩の部分を指差す。そこには僅かに魔力と防^{バリア}護^{ジャケット}服が接触した煤の様に跡が残っている。

「ほら、ちゃんとバリアを抜いてジャケットまで通ったよ」

となのはが言うと、エリオとキャロの顔に笑顔が零れる。

「じゃあ、今朝は此処まで、一旦集合しよう」

『はい!』

四人は元気よく返事をしてなのはの下に集まる。その足取りは軽い。最初に集まった時の様に息は切れていらず、今はなのはから一本取れた嬉しさの方が大きい様だ。

なのはも地上に降りて防護服を解除し、教導隊の制服に着替える。

「さて、皆もだいぶチーム戦に慣れてきたね」

『ありがとうございます!』

「ティアナの指揮も筋が通ってきたよ。指揮官訓練、受けてみる?」

「い、いやあの……戦闘訓練だけでいっぱい입니다!」

引き攣った笑顔で断るティアナを見たスバル。

「キュ? キュクル」

「フリードどうしたの?」

足下でキョロキョロと辺りを忙しく見渡すフリードに、キャロが声を掛ける。

「なんか……焦げ臭いような」

「あつ、スバル。あんたのローラー」

その場にいた全員がスバルの足元に目を持って行くと、スバルの自作デバイスであるローラーが火花を出し煙が立ち昇っていた。

「うわっ!? やばっ」

直ぐにローラーを外し、抱き抱える。

「あっちゃ、無理させちゃった」

「オーバーヒートかなあ? 後でメンテスタッフにでも見てもらおう」

「はい……」

「ティアナのアンカーガンも、結構厳しい?」

「はい。騙し騙しです……」

先程の作動不良の事もちゃんと見ていたなのはがティアナに話しかけると、ティアナは表情を暗くして答えた。

「皆も訓練に慣れてきたし……そろそろ実戦用の新デバイスに切り替えかなあ」

「新……デバイス?」

一様に首を傾げるフォワードメンバーの四名。

(……あ)

なのははふと思い出したように先程シンが居たビルの上に視線を向けて見るも、もうそこにシンはいなかった。

(自己スキルの確認の為に利用した。そんな所かな)

シンが少々訓練に参加した理由を推理する。なのはの推理は当たっている。魔力弾一発でなのはの魔力弾を避けたりはしないし、早々に二発や三発と次々と撃ち込んでいる筈だからだ。

なのはは一旦シンの行動に対しての施行を止めると、フォワード四名を連れて訓練場を後にし、隊舎へと足を進める。

「じゃあ、一旦寮でシャワー使って着替えてロビーに集まろうか」

『はい!』

「あれ? あの手って……」

ティアナが前方からやってくる黒いスポーツカーに気づき、その場にいた全員が一斉に同じ方向を向く。

その車はなのは達の前で止まると、窓が開くと共に屋根が消え、中から馴染みの二人の姿が顕れた。

「フェイトさん、八神部隊長!」

なのは達はフェイトの車に近づいて行く。ティアナやエリオはフェイトの車に興味津津で。

「すごい。これ、フェイト隊長の車だったんですか？」

「そうだよ。地上での移動手段なんだ」

スバルの好奇心旺盛な質問に笑顔で答えるフェイト。

「皆も訓練の方はどないや」

「あゝあ……はは」

「頑張ってます」

スバルは少し乾いた笑いを漏らして視線を逸らし、ティアナは苦笑しながら答える。

「エリオ、キャロ……ごめんね。私は二人の隊長なのにあんまり見てあげられなくて……」

「あつ、いえ、そんな……」

「大丈夫です」

フェイトの申し訳ないと言う言葉に、エリオとキャロは笑顔でそんな事はないと答える。実際、フェイトが見れない分なのはが頑張っている為、問題はない訳だが。執務官で元々多忙であるフェイトなのである意味で予定通りと言える。

「四人ともいい感じに慣れてきてるよ。いつ出勤があっても大丈夫」

「そうかあ？ それは頼もしいなあ」

はやてがうんうんと関心していると今度はなのはが問い掛けた。

「二人はどこかにお出かけ？」

「うん。ちよつと六番ポートまで」

「教会本部でカリムと会談や。夕方には戻るよ」

「私は昼前には戻るから、お昼はみんなと一緒に食べようか」

『はい！』

「ほんならな」

そう言うとはやてを乗せてフェイトの車は出発し、その二人をF
Wとなのはの五人は見送ってから隊舎の中へ入って行った。



男性用のシャワールーム。

エリオとフリードは、訓練で掻いた汗を流しに来ていた。脱衣所

で服を脱いでいると、中から水が床に落ちる音が響いていた。

先に誰かが使っているのか気づきながら、タオルを持って中に入る。するとそこには……

「あ……」

「……………」

長い金色の髪を背に流してシャワーを浴びているシンの姿があった。

シンはチラリとエリオを一瞥して確認すると、直ぐに正面を向いてその身体を洗い始める。エリオはただただ呆然とその様子を眺め、フリードを肩に乗せたままその場に立ち止まっていた。

シンの使っているシャワーから流れ出る水の音のみが響くシャワールームで、シンはしばらく無言で身体を洗い続けていたのだが……

「……風邪を引くぞ」

いつまでも動かないエリオに向けて、ボソッとシンが呟く。それで漸くスイッチが入ったかの様にエリオは動きだし、シンの隣の個室へ入るのだが……

「あ……」

このシャワールームのシャワーは手を翳すだけで放水される仕組みになっているのだが、大人の背丈に合わせて設置されているのでエリオだけだと手が届かないのだ。

いつもはお風呂を使っているのですが、このシャワールームは一度も使った事が無かったのだ。それに男の子なので、カラスの行水よろしく、身体を洗って湯船に浸かり温まったら出るという三十分と掛

からぬ作業なのだ。

「……………」

その様子を横目で見ていたシンは、おもむろに自分のシャワーを止めるとそのまま個室を出て隣のエリオの個室へ入る。

「あ、あの……」

戸惑うエリオを余所に、シンは手を伸ばしてシャワーを放水させる。

「うわっ!？」

いきなり自分に降り注いだ温水の雨に驚くエリオ。ある程度エリオが濡れると、シンはシャワーを止める。

シンはそのまま自分のシャンプーに手を伸ばすと、プッシュして液体を掌に出すと、それを両手でなじませて泡立てる。その行動にエリオが首を傾げていると、シンはシャンプーで泡立てた両手でエリオの頭を洗い始めた。

「あ、あの……! ひ、一人で――」

「黙れ」

エリオが断ろうとするのをシンは一言で黙らせる。速攻で断られたエリオはその事に戸惑いながらも、シンに身を任せて頭を洗われる。

（あ……）

そうしていて気が付いた。

シンの洗い方は乱暴過ぎず丁寧で、強すぎずかといって弱すぎず、丁度いい力加減でまんべんなくエリオの頭を洗って行っている事に。決して爪を立てる事はなく、指の腹で優しく頭皮から髪の毛まで解すように柔らかく、髪の毛まで丁寧に一本一本、まるで母の様な優しい洗い方でエリオの頭を隅から隅まで洗っていく。

（優しい……それに、凄く気持ちいい……）

エリオはいつの間にか戸惑いを忘れ、シンに身を委ねる。その様子をフリードは個室の壁の縁に留まって二人の様子を首を傾げて眺めていた。

少ししてシンはエリオの頭から手を外してシャワーへと伸ばし、放水させる。

「あうう……」

「しっかり目を瞑れ」

エリオはシンの言う通り力一杯瞼を閉じて、泡と水から目を守る。その様子にシンは薄っすらを笑みを浮かべながら、エリオの頭を濯いでいく。

そしてエリオの頭を洗い終わると、個室を出て先程まで使っていた個室へと戻る。

（あ……）

エリオは少し寂しさを覚えながら、シンを見つめる。

「後は自分で出来るだろ」

「は、はい……」

返事をするエリオの声に若干元気がない。

そんなエリオを一瞥したシンは、少しシャワーを浴びてからタオルを持って個室を出る。だがエリオの後ろを通り過ぎる際に、どこからか持ってきた子供用の足場をエリオの個室に置き、一言だけ残す。

「洗って欲しかったらいつでも言え。何度でも洗ってやる」

それだけ言うときつさとシャワールームを後にしてしまった。

残されたエリオは、先程の元気の無さは何処へやら。笑顔で身体を洗っていた。

因みにエリオが体を洗い終わってシャワールームを出ても、更にそれから十分近くもロビーで待ちぼうけを食らう事になるのは余談である。

フォワードの四人はシャワーを浴びた後、デバイスルームへとやって来ていた。

「うわぁ……これが」

「私たちの……新デバイス……ですか？」

スバルとティアナは、目の前にある自分専用の新たなデバイスに釘付けとなっていた。

「そうです！」

そんな二人の背後から、シャーリーことシャリオ・フィニーノが楽しそうに挙手する。メカニックで六課の通信使の一人でロングアイチの一員。

「設計主任は私。協力、なのはさんとフェイトさん、レイジングハートさん、リイン曹長！」

その後ろでエリオとキャロが自分のデバイスを見ていた。

「ストラーダとケリュケイオンは変化なしかな？」

「うん、そうなのかな？」

「違うまーす！」

リインがエリオの頭に着地し、二人に変わった点に着いて説明を始める。

「変化なしは外見だけですよ」

「リインさん」

「はいです〜！」

リインは二人の前にあるケリュケイオンとストラーダの近くへ移動する。

「二人はちゃんとしたデバイスの使用経験がなかったですから。感

触に慣れてもらう為に、基礎フレームと最低限の機能だけで渡したです」

「あ、アレで最低限……!?!?」

「ホントに?」

驚愕する二人を余所に、リインの説明は続く。

「皆が扱う事になる四機は、六課前線メンバーとメカニックススタッフが技術と経験の粹を集めて完成させた最新型」

リインは四人の中心へと移動し、四人に向かって話す。

「部隊の目的に合わせて、そしてエリオやキャロ、スバルにティア。個性に合わせて造られた、文句なしに最高の機体です」

そう言う手を手を上げ、四機のデバイスがリインの周りに集まり始める。

「この子達はみんな、まだ生まれたばかりですが……でもそれでもいろんな人の願いや思いが込められてて、いっぱい時間をかけてやっと完成したです」

リインの周りに浮かんでいたデバイスがFW四人それぞれの下へ移動する。

「ただの道具とか武器と思わないで、大切に、だけど性能の限界まで思いつ切り全開で使ってあげてほしいです」

「この子たちもね、きっとそれを望んでいるはずだから」

と、前口上を終えた所で、カシューっとデバイスルームの扉が開いてなのはが入ってくる。

「ごめんごめん！ 遅くなっちゃって」

「なのはさん！」

リインが叫びながらなのはの下に飛ぶ。

「ナイスタイミングです。ちょうど今から機能説明をしようかと」

「そ。皆、もう使える状態なんだよね？」

「はい！」

シャーリーはキーボードをカチカチと操作して、四機のデバイスデータをモニターに出して機能の説明を始める。

「まず、その子達みんな。予め何段階かに分けて出力リミッターを掛けてるのね。一段階目だと、そんなにビクリするほどパワーが出るわけじゃないから、まずはそれで感触を慣れて行っってね」

「で、各自が今の出力を扱いきれるようになったら私やフェイト隊長、リインやシャーリーの判断で解除していくから」

「ちょうど、一緒にレベルアップしていく感じですね」

リインがわかりやすい例えをした後、ティアナが気付いた様に言

った。

「あっ、出力リミッターって言うところ……なのはさん達にもかかってますよね？」

「ああ、私たちはデバイスだけでなく本人もだけどね」

『え！？』

「リミッターがですか！？」

なのはの言葉にフォワード四名は目を丸くして驚きの声を上げる。

「能力限定って言ってね。うちの隊長や副隊長たちは皆だよ。私とフェイト隊長、ヴィータ副隊長とシグナム副隊長」

「はやてちゃんもですね」

「うん」

「えーっと……」

「ん」

スバルやエリオ、キャロの三人はどういう意味なのかあまりよく分かっていない様子で

「ほら、部隊ごとに保有できる魔導師ランクの総計規模はあらかじめ決まってるじゃない」

「あ、はは……そうですね」

「一つの部隊でたくさんのお秀な魔導師を保有したい場合は、そこに上手く収まるよう魔力の出力リミッターをかけるですよ」

「まあ、裏技っちゃあ裏技なんだけどね」

シャーリーはニコニコと笑顔を浮かべてぶっちゃけた。

「うちの場合だと、はやて部隊長が4ランクダウンで、隊長たちはだいたい2ランクダウンかな」

「四つ。八神部隊長ってSSランクのはずだから……」

「Aランクまで落としてるんですか？」

「はやてちゃんもいろいろ苦勞してるですう……」

リインはちよつと落ち込んだ声で言う。

「あの……なのはさんは……？」

「私はもともとS+だったから、2.5ランクダウンでAA。だからもう直ぐ私一人で皆の相手するのは辛くなってくるかなあ？」

スバルが少し戸惑う様に訊ねると、なのはは普通に答える。すると、リインが少々元氣の無い声で言う。

「隊長さん達は部隊長であるはやてちゃんの。はやてちゃんは実質の上司であるカリムさんか、六課の監査役クロノ提督しか解除はで

きないですし。許可は滅多な事では出せないそうです」

「そうだったんですね……」

「まあ、隊長たちの事は心の片隅くらいでいいよ。今は皆のデバイスの事」

『はい……』

返事をするもののどこか四人の顔は暗い。

「新型も皆の訓練データを基準にしてるから、いきなり使っても違和感ないと思うんだけどね」

「午後の訓練の時にでもテストして、微調整しようか」

「遠隔調整もできますから。それほど手間も掛からないと思いますよ」

「はぁ……便利だよねえ最近は」

「便利ですう♪」

そんな二人の年寄り染みた呟きを無視して説明は続く。

「スバルの方はリボルバーナックルとのシンクロ調整もバッチリできてるからね」

「本当ですか!？」

「持ち運びができるように収納と瞬間装着の機能も付けといた♪」

「ありがとうございます!!」



機動六課の屋上。

そこにシンは目を瞑り、ただただ風を感じていた。

《風がよく通る場所ね》

「ああ……此处は数少ない一人になれる場所だ」

吹き抜ける風に身をまかせながらポツリと呟く。慣れない所で仕事をするというのは思ったよりも疲れるらしい。

勿論、肉体的にではなく、精神的にである。そんな風に一人静かな時間を過ごしていると、静かな空気をブチ壊さんばかりの警報が六課全体に響き渡った。

「……事件か？」

《そうみたい。部隊長がデバイスルームへ通信を行っております。

こちらにも回線を回しますか？》

「ああ。頼む」

シンがファフニールに頼んでから数秒後、シンの目の前にモニターが三つ出現する。

それぞれデバイスルームのなのは達、聖王教会に訪れているはやて、車で移動中のフェイトの画面だ。

『教会騎士団の調査部で追っていた、レリックらしき物が見つかった。場所はエイリム山岳丘陵地区。対象は山岳リニアレールで移動中』

『移動中って……まさか！』

なのはが驚いた声を出す。

『そのまさかや。内部に侵入したガジェットの所為で、車両の制御が奪われてる。最低でも内部で三十体。大型や飛行型の未確認タイプも出てるかもしれん』

シンは口元に右手を置き、考える。

（確か……この時間のエイリム山岳丘陵地区のリニアレールは、セレスティアの傘下の運搬会社のリニアが走っていたな）

十一両もある大きな貨物列車だ。想定できる内部の敵の総数は確かに三十は優にいるだろう。更に云ってしまえば、飛行型や大型の事を考えると総数は五十機ほどいるだろう。

『いきなりハードなミッションや。なのはちゃん、フェイトちゃん。行けるか?』

『私はいつでも!』

『私も!』

シンがふと視線を左下にあるヘリポートへ落とすと、そこでは既に出撃の準備を終えようとしている所だった。

『スバル、ティアナ、エリオ、キャロ。皆もオツケーか?』

『はい!』

『よし、いいお返事や。シフトはA―3、グリフィスくんは隊舎での指揮、リインは現場管制! なのはちゃん、フェイトちゃんは現場指揮!』

『了解!』

『それとシン君。この通信を見てるんやろ? 姿見せたらどうや?』

シンは少し目を見開くと、直ぐに無表情に戻して回線を閲覧から共有へ変更する。すると、向こう側にもシンのモニターが現われたのか、多少驚いた表情をする。

『シン君はガーディアンとして状況に合わせて各隊の支援』

「了解」

『ほんなら……機動六課フォワード部隊、出動!』

『はい!!』

その後、シンは通信を切ってヘリポートへ跳び下りる。ダンツ!と重い音を響かせて見事に着地し、そのまま何事も無かったかのようにはりに乗る。

その約一分後なのは達がへりに駆け込み、なのは達を乗せたへりは暴走するリニアが通るエイリム山岳へと向けて飛翔した。

第五話 星と雷

それは数年前の記憶。

第6管理世界に存在するアルザス地方の少数民族ル・ルシエの族長の蚊帳の中で、まだ幼さが残っている少女キャロが正座して族長に向き合っていた。

『アルザスの竜召喚部族……ルシエの末裔、キャロよ』

その土地を渡り歩く少数民族ルシエの族長の家で行われた話し合い。それを少し成長したキャロ自身が見下ろしている。

此処は過去。そう、キャロの記憶の世界。

『僅か六歳にして白銀の飛竜を従え、黒き火龍の加護を受けた。お前は誠、素晴らしき竜召喚士よ』

『しかし、強すぎる力は災いと争いしか生まぬ』

幼いキャロはハツとし、それに合わせる様にフリードも反応する。

『すまぬな。お前をこれ以上、この里に置いておく事は出来んのだ
や』

それを期に、キャロは半ば追い出される様にして部族から出て行った。そして行くあてもなく放浪している内に管理局に入局する事となり、フェイトと出会って、現在に至る。

けれどそれで部族を追い出されたという現実さだめは変わらない。彼女の両親も、その事に反対しなかった。それが運命だと、掟だからと言うかのように、キャロには出来るだけの備えをさせて、旅に出さ

せた。

決して帰れず、終わりのない旅へ。

——竜召喚は、危険な力。

遠くなっていく記憶の世界。

キャロは自身の両手を見つめる。その身に宿る強力な力、希少^{レアス}技能^{キル}である“竜召喚”。しかしそれは強力過ぎる力であるが故に制御しきれず、暴走してしまう。

——人を、傷つける……。

その事実を、まるで鎖の様にキャロに取り付く。

——怖い力……。

その言葉は、暗示の様に自分の中に溶け込んでいく。まるで血に染まる両手の様に、拭き取れない罪の象徴であるかの様に。

★ ☆ ★ ☆ ★ ☆ ★ ☆ ★ ☆

「問題の貨物車両、速度七十を維持。以前進行中です」

「重要貨物室の突破は、まだされていないようですが……」

「時間の問題か……」

六課の隊舎のオペレーションルームでは、グリフィスを中心に状況を整理していた。しかしその瞬間、六課のオペレーションルームに警報ブザーが鳴り響いた。

「アルト、ルキノ！ 広域スキャン！ サーチャー空へ！」

シャーリーがアルトとルキノに指示を出しながらシャーリーはキーボードを叩く。

「ガジェット反応——空から！？」

直ぐにモニターが開き、映し出された上空には、大量の飛行型ガジェットの機影が映る。

「航空型、現地観測隊が捕捉！」

六課が航空型ガジェットを捕捉したと同時にフェイトから通信が入った。

『こちらフェイト。グリフィス、こっちは今パーキングに到着。車を置いて現場に向かうから、飛行許可お願い』

「了解。市街地個人飛行、承認します」

フェイトは車を降りて走りながら、バルディッシュを起動させてバリアジャケットを纏って閃光の如く空を駆け抜けていく。

ちょうどこの時、ヘリの方でも敵機の機影を捉えていた。

「ヴァイスくん！ 私も出るよ！ フェイト隊長と二人で空を抑える！！」

「うっす！ なのはさん頼みます！」

《Main hatch open》

ヴェイスのインテリジェントデバイス「ストームレイダー」がヘリ後部のメインハッチを開く。

「じゃあ、ちょっと出て来るけど。みんなも頑張ってズバツとやつつけちゃおう！」

『はい！』

「はい！」

一人返事が遅れるキャロに気づいたのはは、彼女の不安を拭う様にゆっくりと近づいて優しく声を掛ける。

「キャロ。大丈夫、そんなに緊張しなくても」

キャロの顔を優しく触れ、僅かに上に向ける。

「離れてても通信で繋がってる。一人じゃないから。ピンチの時は助け合えるし」

優しく励ます様に語り掛けるなのは。

「キャロの力はみんなを守って上げられる。優しくて強い力なんだから、ね」

なのははそれだけ言うと、踵を返してハッチに向かって走り出し、思いつ切り外へ飛び出す。

シンがヘリの窓から下を覗くと、なのはが桜色の光に包まれ、その直後にガジェット？型が出現したポイントへ向かって一気に飛翔する光景が見えた。

なのはが出て行った後、リインがフォワード陣に今回の初任務の説明を始める。

「任務は二つ。ガジェットを闘争させずに全機撃墜する事。そしてレリックを安全に確保する事。」

リニア全体のモニターが六人の前で開かれる。

「ですから、スターズ分隊とライトニング分隊。二人一組のコンビでガジェットを破壊しながら車両前後から中央に向かうです」

十一両あるリニアの中央の一両に、レリックの入ったケースがそこにあると提示される。

「レリックは此処、第七車両目の重要貨物室。スターズかライトニング。先に到達した方がレリックを確保するですよ」

『はい！』

「で、私も現場に降りて、管制を担当するです」

リインはクルリと一回転すると、はやての騎士服によく似た白い騎士服に着替えて出撃に備える。

そして任務説明が終わる頃、へりは丁度降下ポイントである暴走するリニアの真上に辿り着いた。

「さあて新人共。隊長さん達が空を押さえてくれてるおかげで、安全無事に降下ポイントに到着だ。準備はいいか！」

『はい！』

へりを操縦するヴァイスの激励にスバルとティアナはハッキリと応える。

「スターズ03^{スリー}。スバル・ナカジマ！」

「スターズ04^{フォー}。ティアナ・ランスター！」

スターズ分隊の二人は、互いにタイミングを見合わせてへりのハッチからリニアに向けて飛び降りる。

『行きますッ！！』

青色とオレンジの光に包まれ、新しくなった相棒をセットアップする。

あの間に、ライティング分隊のエリオとキャロがハッチの前に並び立つ。

「次、ライトニング！ チビ共、気いつけてな」

『はい！』

こちらでも元気に返事を返し、いざ降りようとする、が――

「……………」

キャラは緊張しているのか、固まってしまって動けずにいた。

「キャラ」

硬直するキャラに、ヘリの壁に寄り掛かっていたシンが声を掛けた。

「お前は何がほしい？」

「え？」

「お前の求める力とは何だ？」

今まで話し事すらない相手から声を掛けられ、更にはよくわからない質問をぶつけられてキャラは戸惑う。

「分からないなら、ヒントをやる」

シンは寄り掛かっていた壁から背を離すと、ゆっくりとキャラのそばに近寄る。

「力とは、使って初めて力として、意味を持つモノ」

シンは腰を下ろしてキャロに視線を合わせて優しく頭を撫でる。

「しかし力を使わなければ……それはただの飾りに過ぎない」

キャロはフツと表情に陰りを見せ、僅かに視線を下に落とす。シンはそんなキャロの顔を無理やり上に向かせることはせず、ただ優しく、しかし力強くキャロに言う。

「今すぐ自分を信じろとは言わない。だが、少しでいい。自分の力を信じてみる」

「しん……じる……」

ボソリと零した一言。しかしそれは確実にキャロの心に何かが刻まれたという証拠。

「お前の力は、本当に……誰かを傷つけるだけの力か？」

「あ、あの……」

戸惑うキャロに、シンは優しく頭を撫でながら言葉を掛ける。

「お前の力は、お前だけの力だ」

「私……だけの……」

「自分の意志で、誰かの為に、使ってみろ。お前には、それが出来る白竜ともだちがいるだろ？」

そう言ってポンポンと軽く頭を叩くと、立ち上がり一歩下がり、後は任せると言った様にエリオに視線を送る。後は任せた、という視線の意図に気づいたエリオは小さく頷き、キャロに手を差し伸べる。

「一緒に降りようか」

「あ……うん！」

キャロは力強く頷くと、差し出されたエリオの手を掴む。

「ライトニング03。スリーエリオ・モンディアル！」

「ライトニング04。フォーキャロ・ル・ルシエとフリード・リヒ！」

「キュクルー！」

二人はギュッと手を握り、意を決してへりから飛び降りる。

『行きます！』

へりから飛び降りた二人の手首にあるデバイスが起動し、二人の姿を黄色と桃色の光が包み込む。

フォワード全員が出て行き、残ったリインがシンに話しかける。

「シンさんは子供には優しく接するんですね」

「あの子に必要な言葉ときっかけを与えたにすぎませんから」

無表情に淡々と答えるシン。そんなシンにクスリと笑みを浮かべて、リインは真剣な表情で指示を出す。

「シンさんは別命があるまで待機です」

「はい」

「でもフォワード陣のフォローが必要だと思った時は、自分から出て貰っても構わないです」

「了解」

リインはシンが頷いたのを確認して、フォワード陣の後を追って降りていく。全員を見送ると、シンは再びヘリの壁へと寄り掛かる。

「せめて見てやるぐらいはしろって」

モニター越しにシンの様子を見ていたヴァイスが苦笑い気味に言う。

「この程度の相手なら、アイツらほどの能力があれば、できて当然。寧ろ、出来ない方がおかしい」

「つまりは新人共を信用してるって事だろ？」

「違います。個々の能力の高さを評価しただけです」

「素直じゃねえな」

「素直もなにも、それ以外に何か？」

「へえへえ。ま、そう言う事にして置いてやるよ」

シンはヴァイスのニヤニヤした表情をモニター越しに見ながら小さく溜息を吐き、話しかけるなと言う風に目を閉じてしまった。

「しかし……力とは使って初めて力として意味を持つモノだ、か」

ヴァイスは先ほどシンが言っていた言葉を反復する。

——お前の力は本当に……誰かを傷つけるだけの力か？——

そしてヘリの音でどうせ聞こえないだろうと思って、小さく小さく呟く。

「……耳が痛いねえ」

その頃、降下したフォワード四名は空中でデバイスをセットアップし、バリアジャケット防護服を装着してリニアの前方にスターズと後方にライトニングの分隊で分かれて着地。リインはライトニング分隊の方へ降りる。

「あれ？ このジャケットって……」

リニアに着地してすぐ、スバルが自身の着ているバリアジャケット防護服の印象に気が付いた。その様子に可愛い悪戯が成功したかの様に、降りて来

たりインが楽しそうにスバル達の疑問に答える。

「デザインと性能は、各分隊の隊長さん達のを参考としてるですよ。ちよつと癖はありますが、高性能です♪」

その説明にそれぞれ感激していると、突然立っている車両の屋根がメキメキと音を立てて盛り上がる。

「スバル、感激は後！」

ティアナが注意した次の瞬間、青い光線と共に屋根が吹き飛ぶ。

《Drive ignition》

ティアナは、新たに得たインテリジェントデバイス『クロスミラーージュ』を構える。

《Variable Barrett》

破れた屋根からガジェット・ドローン？型が触手の様に蠢くケールをうねらせて這い出て来た瞬間を狙ってAMFを突破する多重弾殻で作られた魔力弾を二発撃って破壊する。

ティアナがガジェットを破壊すると同時にスバルが走りだし、ガジェットの開けた吹き抜けに跳ぶ込む。

「うおりゃあああ！！」

右腕に装着しているリボルバーナックルの歯車が高速回転して衝撃を加速。そのまま真下にいたガジェットに思いつ切り拳を叩き込み、ガジェットはその衝撃で爆散する。

「っ！」

周りにいたガジェットのカールによる攻撃をしゃがんで回避し、そのままローラーで滑って破壊したガジェットを攻撃してきたガジェットの内の一団に投げつけて破壊。

《Absorb Grip》

ガジェットが放つ光線を速度を上げて回避して一気に壁を駆け上がる。

屋根の上に張り付く様にしてこちらを狙っているガジェットを確認し、リボルバーナックルのカートリッジを一発消費し、歯車が高速回転する。

「リボルバー……シュート!!」

走りながら右腕を引いて力を溜め、思いつ切り突き出して衝撃波を放つ。撃ち放たれた衝撃波はガジェットに見事に命中して押し潰されるが、放った衝撃波は止まる事も威力を落とす事無く屋根を完全に吹き飛ばし、スバル自身も外に放りだされる。

「うわああ!?!」

《Wing Road》

一瞬パニックに陥りそうになったスバルの代わりにスバルのローラー型インテリジェントデバイス『マッハキャリバー』がスバルの先天魔法『ウイングロード』を展開して足場を作る。

スバルはそれに驚きつつも、体勢を立て直してウイングロードを

走って最初に降りて来た車両の上に降り立つ。

「うわぁ……マッハキャリバー、お前って実はかなり凄い？　グリップコントロールとか、加速とか、ウイングロードまで……」

《Because I was made to make you run stronger and faster》―私はあなたをより強く、より速く走らせるために作り出されましたから。

コアである水色のクリスタルが点滅して、マッハキャリバーがスバルの質問に応える。

「うん。でも、マッハキャリバーはAIとは言え、心があるんですよ？　だったらちょっと言い換えよう」

スバルはスツと立ち上がると大きく口を開けた車両のへ目を向ける。

「お前はね？　私と一緒に走る為に、生まれて来たんだよ」

《I feel it the same way》―同じ意味に感じます。

「違うんだよ、色々と」

辞書で調べれば意味合的にはまるで違いは無く、マッハキャリバーの言葉も、スバルの言葉も殆ど同じ意味を示す。しかしマッハキャリバーの言った意味だと、極論ではあるがにサポートする為だけに創り出されただけに聞こえる。

だがスバルの言いたい事は、共に走ったり闘うパートナーとして、

コレからを共に生きる相棒として、出会う為にと言う風にも聞こえる。

《I'll think about it》—考えておきます。

「え?…:…うん」

スバルの言った言葉の意味をなんとなく悟ったマツハキヤリバーは、一言そう言うと言った。だがスバルにはその一言で、マツハキヤリバーが何を言いたいのかを理解し、笑みを浮かべて頷いた。



丁度同じ頃、機動六課のオペレーションルーム。

「スターズ01^{ワン}、ライトニング01^{ワン}。制空権獲得」

「ガジェット?型、散開開始。追撃サポートに入ります」

シャーリーとアルトが現在状況を実況する。そんな中、オペレーションルームの扉が開き、聖王教会から帰って来た六課の部隊長はやてが入室する。

「ごめんな、お待たせ」

「八神部隊長！」

「お帰りなさい」

「此処までは比較的に順調です」

グリフィスが現在までの状況を簡単に説明し、はやては部隊長席に座って状況を確認し始める

「ライトニングF、八両目突入……っ！」

しかしそれと同時にシャーリーのモニターに警告音が響く。シャーリーがすぐさまモニターに映る車両をスキャン。

「エンカウント！ 新型です！」

と機動六課のオペレーションルームで新型を確認した頃。

シンはライトニングの二人が車両内にいる球体型の大型ガジェット・ドローン？型と睨み合っているのを、ヘリの窓から覗きこんでいた。

「大型か……」

ガジェットの大きなアームでの攻撃を回避し、エリオが突っ込んでキャロが後方で支援する。だが思ったよりもガジェットの装甲が硬かったようで、エリオのストライダーの刃に電撃を付加した一撃でも刃が立たなかった。

そしてガジェットはAMFを展開し、二人の魔法が強制解除される。

「思った通り、AMFの濃度は高めだな」

《?型の十機分に相当するAMFの濃度と展開領域です》

ファフニールの分析したデータを聞きながら、エリオとキャロがどうするか、それをただヘリの上から黙って見守るシン。そんなシンにヘリを操縦しているヴァイスが話しかける。

「いいのか? 行かなくて」

「行く? 何処へ?」

質問の意味が分からないと言った風に、開いたモニターに映るヴァイスに顔を向ける事無く答えるシン。

「だからガキどもの所に、だよ。分隊のフォローをするのが部隊守護のお前さんの仕事だろ?」

「この程度でオレが必要だと思っているのか? スナイパーと呼ばれ称えられたほどの実力者が、堕ちたものだな」

「お前……」

モニター越しのヴァイスの眼が細く鋭くなる。

「何でお前が知ってんだ? 誰にも言っていない筈なんだがな、それ」

その声にはわずかながらに怒気が混じり、その声を聞いたシンは不敵な笑みを浮かべて言った。

「情報レベルC。局員の中でも上の役所に就いていなければ開示されない情報だが、オレの前では公開されているのと同じ」

そう言うと、シンはヴァイスの局員データを開いてヴァイスの目の前に提示する。それを見て、ヴァイスは表情を暗くする。

「オレはお前の様なミスは絶対にしない。オレとお前らとは根本から違う。オレは……っセレスティアだ」

「……………」

「それによく見てみる」

シンに促される様にヴァイスはモニターでエリオとキャロを見る。二人は苦戦しながらも、なんとか倒そうとガジェットと取っ組み合っている。

「この程度の敵を二人で相手に出来ないなら、此処には必要ない。だが、二人は必要と判断されたから此処にいる。それだけの力がある」

確かに、いくらまだ十歳と言っても自分たちで志願したからだと言っても、必要と判断されなければ機動六課には居ない。そこには自分の意志と、必要とされる力を持っているから。

「後は……それを自分の物にするだけだ」

そう言ってシンが見下ろした先には、車両の中でガジェットと戦うエリオを見つめるキャロが見えた。

（さあ、キャロ・ル・ルシエ。どうする？ この状況を打開するには……方法は一つだけだぞ）

◆ ◇ キャロ side ◇ ◆

これは私がフェイトさんと出会った時の記憶。

白く、そして広い部屋。私の前に立っている男性局員が私の事を淡々と金髪の女性に説明していき、私はそれを椅子に座ってただ黙って聞いているだけ。

『確かに凄まじい能力を持っていますけど……制御がろくに出来ませんよ』

局員の一人が私の局員データが乗っているだろうファイルを見ながら女性に説明する。でも、その口調が徐々に私に対する棘を含んでいく様に悪くなっていく。

『竜召喚だって、この子を守ろうとする竜が勝手に暴れ回るだけで。とてもじゃないけど、まともな部隊で働くなんて出来ませんよ。せいぜい、単独で殲滅戦に放り込むぐらいしか――』

『ああ、もう結構です。ありがとうございました』

女性は説明を続ける男性局員の説明を途中で遮てやめさせた。

『では……』

『いえ、この子は予定通り僕たちが預かります』

『え……』

私はこの金髪の女性――フェイトさんに引き取られた。
久しぶりに施設から出る。真っ白で冷たい雪が降り積もる中、
フェイトさんは私の首にマフラーを巻いてくれた。

『私は、今度は一体どこに行けばいいんでしょう？』

『それは、君が何所に行きたくて、何をしたいかによるよ。キャロ
は……どこに行つて、何をしたい？』

私が眼を白黒させているとフェイトさんは優しく微笑んだ。そんな事、考えたこともなかったから。

私の周りにはいつも私がいちゃいけない場所があつて、しちやいけない事があるだけだったから。

「ぐああああ!!」

エリオ君の悲鳴で、私は思い出から現実に戻される。

「……………」

大型のガジェットの攻撃で気を失ったエリオ君は、ガジェットのアームに掴まれて車両の屋根から投げ捨てられ様としている。

此処は高速で走行するリニアの上。その上、リニアが走っている現在位置は断崖絶壁。このまま落ちて行けば確実に死んでしまう。

「エリオ君……」

ガジェットは何の迷いもなくエリオ君をリニアの外へと投げ捨てる。どんどん落下していくエリオ君。助ける方法は立った一つ。自分が共に跳び下りてA M F圏外に脱出し、そこで竜召喚を使うこと。でも私は竜召喚をコントロールできない。どんなに強い力でも、コントロールできなかつたら人を救う事は出来ない。

「エリオくん!!」

それでも私は、エリオ君を追ってリニアから飛び降りた。力無く落ちていくエリオ君。守りたい、優しい人。

——キャロの力は、みんなを守って上げられる。優しくて強い力なんだから。——

私に必死に届けと手を伸ばす。

笑いかけてくれる人たちを……自分の力で……。

——自分の意志で、誰かの為に使ってみろ。お前には、それが出来る白竜がいるだろ?——

「守りたいっ!」

伸ばした手はエリオ君の手を掴んだ。私はすぐに抱き寄せる。

《Drive Ignition》

その瞬間、ケリュケイオンから桃色の光が溢れ、私達を包みこみ、落下速度が徐々に落ちて行く。そこへ後を追って来たフリードがやって来た。

「フリード。今までずっと不自由な思いをさててごめん。私、ちゃんと制御するから……」

覚悟が出来ているかと言われると、正直できてないと思う。でも、今やらなきゃ。今出来なきゃ。きつといつまで経ってもできないと思うから。

「行くよ、竜魂召喚！」

ケリュケイオンから放たれる光が、更に強く光り輝く。そして私達を包み込む桃色の光の内に、大きな召喚魔法陣が展開される。

「蒼穹^{せいおうきゆう}を駆ける白き閃光。我が翼となり、天を駆けよ」

足下に広がる魔法陣から一対の大翼が現われる。

「来よ、我が竜フリード・リヒ」

ケリュケイオンのコアが放つ光がより一層強く輝き、桃色の光が飛び散る。

「竜魂召喚！！」

——ギャオオオオン！！

桃色の光球を突き破り、キャロとエリオを背に乗せた白銀の飛竜が姿を現す。その姿は暴走したモノではなく、完全にコントロールし、過去を乗り越えたキャロの翼として、二人を乗せてフリードは堂々と大空へ舞い上がる。



キャロが竜召喚を成功させた事をへりから見ていたヴァイスとシン。

「すっげえ……」

「フッ」

ヴァイスはその様子に感動し、シンは満足げに笑みを浮かべる。そんなシンに、ヴァイスが話しかける。

「お前、まさかこうなる事を分かって……」

「さあな。いくらきっかけを与えたとしても、それを次の段階へ昇華させる事が出来るかどうかはアイツ次第だ」

確かにいくら周りがきっかけ与え、助力を尽くしても、本人がそれを乗り越えようとしない限り、その行為は無意味でしか無い。だが、キャラはエリオを助ける為にその力を使った。

今まで不安を感じながら力を使っていた事で、無意識の内に力をセーブしてその影響が暴走となって現われていた。シンはそう考え、今度は覚悟を決めた自信を持って使えるように少しでもキャラの背中を押した。

「これがキャラ・ル・ルシエの本当の実力さ」

シンは眼下で飛竜の背に乗るエリオとキャラを優しい眼で見つめる。

《で？ 実際は何をしたんですか？》

ファフニールの問いに、シンは少し眉を寄せるも、直ぐに無表情に戻って答えた。

「……少しだけ暗示を掛けただけだ」

「暗示？」

シンとファフニールの会話を聞いていたヴァイスが口を挟む。

「キャラが力を使う時、不安を感じる事無く自信を持てる様に、な」

《やはり子供には甘いですね》

「黙ってろ」

《はいはい》

ファフニールは楽しげに答えて、言われた通りに黙る。シンが思わず溜息を吐きそうになったその瞬間。

「——っ！」

シンは異様な何かを感じ取った。思わずヘリのハッチから外を見まわして気配の原因を探すが、何処にも何も特に変わった物は見えない。

（気のせいかな？ いや……この感覚は……）

《マイスター？》

「どうかしたか？」

ファフニールとヴァイスが訊ねてくるが、シンは暫らく黙ったまま外を見つめ、

「いや、何でもない」

と言って誤魔化した。

（……今は様子見だな）

そう心の中で決めて再びリニアの方を見ると、丁度エリオがキャロの支援を受けてガジェットを破壊する所だった。フィールド貫通、威力強化の支援魔法を受けた魔力刃がガジェットを貫き、上に向け

て振り抜いて真っ二つに引き裂かれて爆発。

(……よくやったな)

シンは念話も使わず、心の中で二人の頑張りを労う。だがその表情は非常に優しいもので、シン・セレスティアと言う人物がどういう人間なのかを物語っていた。

遠く離れた空の上でその光景を見ている男がいた。白衣の騎士服に身を包み、肩まで伸びる黒髪と黒い瞳をもつ男が。

『刻印ナンバー?。確保されました』

『ふむ……』

『追撃戦力を送りますか?』

「それとも……俺が行こうか?」

白衣の騎士は二つ開いた小型モニターを見る。そこには、怪しい笑みを浮かべ、白衣に身を包み、肩まで伸びる青紫色の髪と金色の瞳をもつ男と、同じく肩まで伸びる青紫色の髪を持つ女性が映っていた。

『いや、いらないよ。レリックは惜しいが彼女たちのデータが取れただけで十分さ。それにしても……』

白衣の男はモニターから目を逸らし、別のモニターに目を向ける。

『私の研究にとって興味深い素材が備わっている上に……』

更に画面は変わりそこに三人の人間が映し出される。フェイト・T・ハラオウンとエリオ・モンディアル。そしてシン・セレスティアが映し出されていた。

『この子達、生きて動いているプロジェクトFの残子を。手に入れるチャンスがあるのだから』

白衣の男の不気味な笑い声が、白衣の騎士が浮かぶ青い空に響く。

「だけど本命は戦ってすらいないだろ。そんなんでデータが取れるのか？」

『ああ。それはいいのさ。どうせこれから戦う事になるのだからね。彼がセレスティアである限りね。くくくく……』

白衣の男の不気味な笑い声が青い空に響き、白衣の騎士は群青色の閃光と共に忽然と姿を消した。

第六話 進展

機動六課の髪任務が終わった翌日の午前。リインは休憩がてら、廊下に備え付けられている休憩場所に座りながら個人的な勤務日誌をつけていた。

【五月十三日。部隊の正式起動後、初の緊急出動がありました。密輸ルートで運び込まれたロストログア、レリックをガジェットが発見、輸送中のリニアレールを襲撃。それを阻止、レリックを回収するという任務でしたが。六課前線メンバーの活躍もあって無事に解決。確保した刻印ナンバー？のレリックは、現在中央のラボにて保管、調査中。初任務としてはまず問題ない滑り出しだと部隊長のはやてちゃん。六課の後見人、騎士カリムとクロノ提督も満足しているようです】

「リイン曹長」

「ん？」

リインがロビーのソファアに座って勤務日誌を付けていると、突然声を掛けられた。

顔を上げて正面を見ると、そこには六課の通信主任兼メカニック（デバイス）のシャーリーもといシャリオ・フィニーノ一等陸士がこちらを見下ろしていた。

「あ、シャーリー！」

「ご休憩ですか？」

「休憩半分、お仕事半分。個人的な勤務日誌を付けてたですよ」

リインはモニターを再びカチカチと操作し、モニターを全て閉じてシャリオの前まで飛んで近づく。

「シャーリーは？」

「新しいデバイス達の調子を見に、訓練場の方に行って来たんですよ」

「ああ、そうですか。みんな元気でした？」

「はい。フォワード陣もデバイス達も、もう絶好調」

シャリオはまるで自分の事の様にうれしそうに答えた。

ちょうどシャリオがリインと出会った頃。海上に大きく飛び出た訓練場は、林と山岳地帯を再現してフォワード四名の訓練が行われていた。

「おらあ！ 行つくぞお！」

ヴィータはハンマー型アームドデバイス「グラーフアイゼン」を振り振り、スバルに向かって走っていく。

「マッハキャリバー！」

《Protection》

スバルが右腕を突き出し、リボルバーナックルの歯車が高速回転して水色のバリアを展開する。

「でえや！」

ヴィータは助走を付けて前へ飛び込み、スバルのバリアを思いっきり叩く。だが、彼女の圧倒的な力押しの前に、スバルはジリジリと後ろへ後退させられていく。

「でえりゃあー！」

ヴィータは再びグラーフアイゼンを振り被り、間髪入れず横から振り抜く様に全力でスバルのバリアを叩く。

「うあああああああ！？」

叩かれた衝撃に耐えられず、バリアを展開したまま後方に飛ばされて木にぶつかって停止する。

「ふむ……」

「っ！ いったあ……」

スバルは痛がっているものの肝心のバリアは破られておらず、未だに展開されたままだった。

「なるほど、やっぱりバリアの強度だけはそんなに悪くねえな」

「あ、ありがとうございます」

「私やお前のポジション、フロントアタッカーはな。敵陣に突っ込んだり、最前線で防衛ラインを守ったりが主な仕事なんだ」

スバルはバリアを解除し、ヴィータの所までローラーで滑って戻り、ヴィータの説明に耳を傾ける。

「防御スキルと生存能力が高い程、攻撃時間が長く取れるし。サポート時にも頼らねえで済む……って、これはなのはに教わったな？」

「はい、ヴィータ副隊長」

「受け止めるバリア系。弾いて反らすシールド系。身に纏って自分を守るフィールド系」

左手にバリアを、右手にシールドを展開し、そしてその身にフィールドバリアを纏ってスバルに見せてやる。

「この三種を使いこなしつつ、ポンポンすっ飛ばされない様に、下半身の踏ん張りとおマッハキャリバーの使いこなしを身につける」

「頑張ります！」

《I'll learn》——学習します。

それを聞いたヴィータはアイゼンを振り回しながら言う。

「防御ごと潰すのは私の得意分野だからな」

チャキツとスバルの首元にグラーフアイゼンを突きつけるヴィー

タ。

「グラーフアイゼンにぶっ叩かれたくなかったら。しっかり守れよ」

「はい！」

スバルは元気よく返事を返し、再び右手に装着されているリボルバーナックルを構える。

また同じ訓練場の別の所では、ライトニング分隊の二人の訓練が行われていた。

「エリオとキャロはスバルやヴィータみたいに頑丈じゃないから、反応と回避がまず最重要。例えば……こうやって……こんな風に」

フェイトは周りに浮かべるスティアを起動させ、鈍足で撃たれた攻撃を歩方ステップで回避していく。

「まずは動きまわって、狙わせない。攻撃が当たる位置に、長いしない」

フェイトが走り回れば、最低レベルに設定されているスティアはフェイトの姿を追ってクルクルと回り始める。

「ね？」

『はい』

「これを低速で出来るようになったら……」

先程よりも高速で撃ち出される攻撃。徐々にその精度と速度を上げていきながら、フェイトは走って跳んで回避する。

「スピードを上げていく」

スティアの攻撃が一旦や止み、フェイトがその場に止まり様子を窺う。その瞬間を待っていたかのようにスティア達が一斉にフェイトを狙い撃つ。

放たれた攻撃の雨は、フェイトがいた地点に爆音を響かせて爆発し、粉塵を巻き上げる。

「こんな感じでね」

『えっ!?!』

後ろから聞こえた声に二人が振り向けば、フェイトが微笑んでそこにいた。もう一度先程の場所を見ると、フェイトが地面をえぐりながら高速で迂回して来たという跡が残っていた。それはフェイトの代名詞、ソニックムーブを使ったという確かな証拠。

「す、す……」

「今のも、誰でも出来る様な基礎アクションを早回しにしてるだけなんだよ」

『は、はい』

「スピードが上がれば上がる程、感やセンスに頼って動くのは危な

いの」

フェイトはその場にしゃがんで二人の目線の高さに合わせ、フェイトエリオに顔を向ける。

「ガードウィングのエリオは、どの位置からでも攻撃やサポートが出来るように」

次に隣に立つキャロに向く。

「フルバックのキャロは、素早く動いて仲間に支援して上げられるように」

二人の肩に触れながら、微笑みを浮かべて言う。

「確実に有効な回避アクションの基礎。しっかり覚えていこう」

『はい！』

二人が元気に返事をする、その近くで座っていたフリードも「キュクルー」と鳴いた

そしてまた別の場所で、ティアナとなのはが一对一で訓練をしていた。

ティアナは二丁のツーハンドモードになったクロスミラーージュで、バンバン！と連続してオレンジ色の魔力弾を撃つ。

「うん。いいよ、ティアナ。その調子」

「はい！」

なのはの操る魔力弾を次々と撃墜していくティアナ。その足元には、使い切った空のマガジンがいくつも転がっていた。

「ティアナみたいな精密射撃型は、いちいち避けたり受けたんじゃあ仕事ができないからね」

なのはは更にそこから弾丸を増やし、ティアナの背後から三発の魔力弾で狙う。だがティアナは横へ飛んで転がって避けてしまう。

「ほら、そうやって動いちゃうと後が続かない」

そうやってなのはは指先に集めた魔力弾をティアナに向かって放つ。

《Barret V and RF》

ティアナは左右の拳銃を交互に使って放たれた弾丸に向かって引^{リガー}き金を引く。一発目は蛇行して跳んできた一発を巻き込んで空へ登っていき、続けて放った一発は正面から撃たれた一発を相殺する。

「そうそれ！」

なのはがティアナのとっさの行動を肯定するように褒める。

「足を止めて、視野を広く。射撃型の神髄は？」

ティアナは左手のクロスミラージュを背後に向かって撃ち、迫っ

てきていた魔力弾を相殺する。

「あらゆる相手に、正確な弾丸をセレクトして命中させる——」

先ほど空に舞い上がった蛇行する弾丸を狙って撃ち落とし、更に側面から迫ってきていた魔力弾も撃ち落とす。

「判断速度と命中精度！」

使い切ったマガジンを排出し、新しいマガジンを右足に巻きつけた専用ポケットにクロスミラージュを突っ込んで装填する。

「チームの中央に立って、誰よりも早く中長距離を制する。それが私やティアナのポジション」

また更に魔力弾を増やす。

「センターガードの役目だよ」

「はい！」

ティアナはなのはに視線を向ける事無く、ただ必死なのはの訓練に喰らい付いていくので精いっぱいだった。

そして六課隊舎の事務仕事をするオフィスでは、人がまばらにそれぞれの作業に没頭していた。そしてその中に見慣れた金髪の青年の姿を見つけた。

「……………」

シンは一見事務仕事をしているように見えるが、そのキータッチを見ずに淀みなく動くその速度は圧巻だった。モニターは絶え間なく閉じたり開いたりを繰り返し、シンはそれを余す事無く流し読みしていく。

ただ流し読みしているようでも、実際には内容のほとんどを要点だけを覚えて行って、他の余分な所やデータは全てはファフニールが記録していた。

——うーん……あんまりいい情報無いね。

ファフニールがシンに念話で話し掛ける。

——ああ、だがそう簡単に尻尾は掴ませないだろうな。こんな僅かな情報にこれだけの無意味に蛇足を付け加えて大容量にしてるんだからな。

——それは云えてる。だって後見人が、あのハラOWN親子なんだから、当たり前だけどね。

クスクスとファフニールが笑う。リンディ・ハラOWN総務統括官とその息子クロノ・ハラOWN提督は、本局の上層部では二人を喰えない腹黒親子だなんて陰で言われている。

そして、そのハラOWNの姓を持つフェイトもまた上層部からは嫌われている。

——まあ此処には狸と称される人間がいるからな。こういう事情に関して人一倍、警戒しているんだろうな。

——歩く古代遺失物、喰えないチビ狸、ね。なんとまあ可愛げの無い異名。ロストログア

ケラケラと楽しそうに笑うファフニール。

——なにせ異名だからな。その人物を如実に表しつつも畏怖される。とても良い呼び名だと思うが？

——相変わらずの毒舌ね。それに凄く楽しそう。

というファフニールだが。実際には、シンは先ほどから全く言変わらぬ無表情のまま変わらない。そして全く止まる事なくキーをタッチして情報を開示していく。

——こんな問題だらけの部隊だ。こんな所は早々に立ち去りたいのが本音だ。

小さな穴でもあれば、彼はそれを容赦なく抉じ開けて六課を潰しにかかるだろう。それだけ彼は此処にいる事を良しとしていない。

——人形どもと慣れ合う気などサラサラ無い。とっとと裏を取って叩き潰す。

シンの眼が一気に冷たくなる。

——……了解。

ファフニールはその様子の変わりぶりに溜息を漏らすように応えた。

★ ☆ ★ ☆ ★ ☆ ★ ☆

あれから数時間後。

ピィィィ!!と笛の音が響き、訓練の終了を訓練場全体に告げる。

「はい、じゃあ午前の訓練終了!」

なのはの号令で漸く座る事を許されたフォワード四名は、地面にだらしなく座り込んで「ぜえ……ぜえ……」と息を粗くして呼吸する。

「はい、お疲れ。個別スキルに入ると、ちょっとキツイでしょ?」

「ちよつとと……言うか……」

「その……かなり……」

ティアナとエリオが息も絶え絶えの状態で返答しようとするが、身体が酸素を求めて上手く話せない。

「フェイト隊長は急がしくて、そうしょっちゅう付き合えねえけど。あたしは当分お前らに付き合っただけでやるからな」

アイゼンをかざしてニヤニヤしながら言うヴィータにフェイトは

苦笑。

「あ、ありがとうございます、ます」

訓練がかなりキツかったのか、かなり引き攣った顔で言うスバル。

「それから、ライトニングの二人は特にだけど。スターズの二人も、まだ身体が成長してる最中なんだから。くれぐれも、無茶はしない様に」

『はい』

「じゃ、お昼にしよっか」

『はい！』

待ってましたと特にエリオとスバルが元気良く返事を返す。新人達の息が整うまでその場で休憩をとると、六課の隊舎に向かって移動し始めた。

しかし隊舎の前で、はやてとリインが目の前に止めてある車に乗ろうとし、それをシャリオが見送っているのを見つける。

「あ、みんなお疲れさんや」

『はい！』

訓練から戻って来たフォワード陣営が返事を返す。

「はやてとリインは外回り？」

ヴィータが聞けばリインが答える。

「はいです。ヴィータちゃん」

「うん。ちょ、ナカジマ三佐とお話して来るよ」

ナカジマと聞いてスバルが反応した。

「スバル。お父さんとお姉ちゃんに、何か伝言あるか？」

「いえ、大丈夫です」

返事を聞いたはやて達が車に乗り込み、エンジンを掛ける。

「じゃあ、はやてちゃん、リイン。いってらっしゃい」

「ナカジマ三佐と、ギンガによろしく伝えてね」

「うん」

「いってきまーす！」

なのはとフェイトに挨拶して、はやて達はバギーを発進させてあつという間に見えなくなってしまった。

フォワードの四人とシャリオは食堂に着いて、約二名――エリオとスバル――が山盛りのスパゲッティを突きながら、フォワード陣それぞれの話していた。

因みになのはとフェイトはまだ仕事があるからと別行動している。

「スバルさんのお父さんとお姉さんは、陸士部隊の方なんですネ」

「うん。八神部隊長も一時期、父さんの部隊で研修してたんだって」

「へえ〜。あ……」

キャロの口から感心した様な声が漏れたと思ったら、何かに気づいたような声を漏らしてスバルの後ろを見詰める。

疑問に思った他のメンバーがキャロの見ている方に目を向ける。

『あ……』

そこには、シンがAランチを乗せたお盆を持って辺りをキョロキョロしながら口を小さく動かしている。おそらく自分のデバイスと会話しているのだろう。だがこの時間の食堂は混んでいる為、空いているテーブルは少ないだろう。

「あ、あの！」

「セレスティア三尉！」

キャロとエリオが声を上げてシンを呼ぶ。その声に反応したシンが二人の方を見る。

「こっちのテーブルが空いてます！」

キャロがそう言うと、シンはまた口を小さく動かして自分のデバイスと一言二言ほど交わし、それから漸くキャロの誘導に従って歩

いてくる。

「ど、どうぞ」

「ああ。ありがとう」

エリオが近くから持ってきた椅子に座るシン。キャロとシャリオが横にズレて場所空ける。

「居ないものと思って会話を続けてください。気にしませんし、どうせ聞き流すだけですから」

と、それだけを言って、それからは何も言うことなく黙々と食事をし続ける。

妙な空気になりながらも、ティアナはそんな空気を変えようと話題を提供する。

「に、にしても、ウチの部隊関係者繋がり多いですよ。隊長達も幼馴染同士なんでしたっけ？」

ティアナが口にした疑問を、向かいに座ってパンを千切って食べているシャーリーに聞く。

「そうだよ。なのはさんとはやて部隊長が同じ世界出身で……」

シャリオはパンを千切って食べる。

「フェイトさんも、子どもの時はその世界で暮らしてたとか」

自分の皿に山盛りに盛っていたスパゲッティを食い尽したエリオ

が口をはさんだ。

「ええっと、確か……管理外世界の九十七番」

「うん」

シャーリーが肯定した所に再び自分の皿に山盛りに盛るスバルが言った。

「九十七番って、ウチのお父さんの御先祖様がいた世界なんだよね」

「そうなんですか？」

「うん」

スバルが空になったエリオの皿に、新しくスパゲッティを盛る。

「そういえば名前の響きとか、なんとなく似てますよね。なのはさん達と」

食べるのが一段落したキャラが言う。

「そっちの世界には、私もお父さんも行った事ないし。よくわかんないんだけどね」

「ふーん」

エリオが適当に相槌をうつ。

「あれ、そう言えばエリオはどこ出身なんだっけ？」

「あ、僕は本局育ちなんで」

スバルとエリオとシンを除く、全員の顔色が変わった。

「管理局本局？ 住宅エリアって事？」

「本局の、特別保護施設育ちなんです。八歳までそこに居ました」

ここまで言われて、ようやくスバルも聴いてはいけない事だったと理解した。

――バカ。

ティアナのジト目と念話で言われて、苦笑いしか出来ない。

「あ、気にしないでください！ 優しくしてもらいましたし、幸せに暮らしていましたんで」

エリオの咄嗟のフォローにシャリオも乗っかる。

「そうそう、その頃からフェイトさんが保護責任者だったんだよね」

「はい！ もう物心付いた頃から色々よくしてもらって。魔法も僕が勉強を初めてからは、時々教えて貰ってて。本当に、いつも優しくしてくれて……僕は今も、フェイトさんに育てて貰ってるって思ってます」

少し間を開けて再び話し出す。

「フェイトさん。子どもの時に家庭で、ちょっとだけ寂しい思いをした事があるって。だから、寂しい子どもや悲しい子どもを放って置けないんだそうです」

実の母プレシアに、娘と最後まで認めて貰えず死に別れてしまった。その経験から、フェイトは自分と同じように悲しんでいる子供たちを、少しでも多く救いたい。そう思う様になり、エリオやキャロの様な子供たちを救っている。

「自分も、優しくしてくれる、暖かい手に救って貰ったからって」

とても優しい顔を浮かべて、自分達に接してくれるフェイトの顔を思い浮かべるエリオとキャロ。彼女に助けてもらい、彼女に育ててもらったからこそ、彼女の力になりたい。そう思って、二人は今此処にいる。

「あの、セレスティア三尉」

「……なんですか？」

自分の話が終わったからかエリオがシャリオを挟んで右に座るシンに話を振る。

シンは食事の手を止めてエリオに向き直る。

「セレスティア三尉も、やっぱりミッドチルダ出身なんですか？」

シンは少し思案すると、ゆっくりと口を開いた。

「ああ。だが付け加えるなら……オレは、クラナガンの外れにあるセレスティア孤児院の出身だ」

『え?』

全員がいきなり言われた言葉に驚愕している。が、その動きは予め予想済みだったのか淡々と付け加えた。

「勘違いしないでください。一応、経営者側ですから」

「あ、そうなんだ――って経営者側?」

シャリオが首をかしげる。孤児院の経営はかなりの費用が掛かる。ミッドの国からの補助が出るとはいえ、相当な経費が必要となる。それをまだ十七のシンが用意できるのかと疑問に思ったのだ。

「最高責任者はオレの母がやっています。オレはその代理をやっていたんです」

それを聞いたシャリオは「ああ、なるほど」と納得する。

「じゃあ、どうして管理局に……?」

「家の事情。それだけです」

スバルが恐る恐る尋ねるが、一言で両断されてこれ以上尋ねられなくなる。

「あ、あの、すみませんでした。不躰な質問をしてしまって……」

エリオがそう言うと、シンはおもむろに服の中に手をつっ込み、ロケット式のペンダントを取り出した。

「それは？」

「見ればわかる」

そう言ってエリオに手渡す。渡されたペンダントにエリオは多少戸惑ったものの、意を決して開いた。

「……………」

エリオはペンダントの中身を見て、次にシンを見て、もう一度ペンダントに視線を戻す。周りの者はエリオが何を見ているのかわからず首を傾げる。

「あ、あの……これ」

「見せてもらって構わない」

心から許可を貰い、ソレを見せる。

「うわゝ」

「綺麗……」

「これって……」

「いっぱい居る」

シャリオ、スバル、ティアナ、キャロが順々にペンダントの中身を見て驚きの声を漏らす。

ペンダントに入っていたのは写真。その中心に苦笑いしているシン。そしてシンを後ろから抱き締めている、シンにとてもよく似た金髪の綺麗な女性。そして笑顔で二人に抱きつく子どもが十五人近くが写っていた。

「それ全員、孤児院の住んでる家族です」

「ねえ、このあんたを抱き締めてる女の人は？」

「その人は母親のルキア・セレスティア。孤児院を経営している人です」

シンは四人の手からペンダントを取り返すと、再び首にかける。

「それでは、お先に」

いつの間にか食べ終わっていたシンは、お盆を持って歩き去っていく。

その後ろ姿を、五人はずっと眺めていた。どういった意味で、あのペンダントの写真を見せてくれたのかも理解できずに。

★ ☆ ★ ☆ ★ ☆ ★ ☆ ★ ☆

六課でシンやフォワードメンバーが昼食をとっている頃、陸士1

08部隊の隊舎。その部隊長室には、ちょうどはやてが訪れていた。

「新部隊、なかなか調子良いみたいじゃねえか」

「そうですね、今のところは」

はやての前に足を開いて座る白髪のおっさんことゲンヤ・ナカジマ三等陸佐。そしてスバルとギンガというスバルの姉の父親でもある。

はやては空港火災の後、一時期ゲンヤの部隊で研修をしていた事があり、ゲンヤの事を師匠と呼んで尊敬している。

「しかし、今日はどうした？ 古巣の様子を見にわざわざ来るほど、暇な身でもねえだろうし」

「愛弟子から師匠へのちょっとしたお願いです」

そこにブザーが鳴り、ゲンヤが入室の許可を出す。

「失礼します」

そう言うてはいつてきたのは、薄い藍色のストレートヘアを紺色の大きなリボンで結んだ少女だった。

「ギンガ！」

「八神二佐、お久しぶりです」

彼女がゲンヤのもう一人の娘ギンガ・ナカジマ。役職は捜査官で

108部隊の隊員だ。スバルの二歳年上で十七歳の陸戦魔導師。近代ベルカ式の陸戦Aランクというエリートだ。

ギンガは、持ってきたお茶セットをゲンヤとはやての間のテーブルに置いて、一礼してリインと共に退室していった。

「お願いしたいんは、密輸物のルート操作なんです」

はやてが赤い宝石の画像を写したモニターを展開する。

「お前んとこで扱ってるロストログアか」

「それが通る可能性があるのがいくつかあるんです。詳しくはリインがデータを持ってきてるんで、あとで説明しますが」

ゲンヤはクイツとお茶を一口だけ飲む。

「まあ、ウチの捜査部を使って貰うのは構わねえし。密輸調査はウチの本業っちゃあ本業だ。頼まれねえことはねえんだが……」

「お願いします」

「八神よ。他の機動部隊や本局捜査部じゃなくてわざわざウチに来るのは……何か理由があるのか？」

真剣な視線ではやてを射抜くゲンヤ。流星は長年管理局に努めている人物名だけはあるといった所か。

「密輸ルートの捜査事態は、彼にもお願いしてるんですが……地上の事は、やっぱり地上の方がよく知ってますから」

「ふむ……ま、筋は通ってるな」

ズズズっとお茶を啜るゲンヤ。

「いいだろ。引き受けた」

「ありがとうございます」

「捜査主任はカルタスで、ギンガはその副官だ。二人とも知った顔だし、ギンガならお前も使いやすいだろ」

「はい。ウチの方は、テストロッサ・ハラOWN執務官が捜査主任になりますから、ギンガもやりやすいんじゃないかと」

と言って自分もお茶を啜り、ゲンヤもまた同じように啜り、部隊長室に二人のお茶を啜る音が響く。

「スバルに続いて、ギンガまでお借りする形になってしまおうて。ちょっと心苦しくはあるんですが……」

「なに、スバルは自分で選んだ事だし。ギンガもハラOWNのお嬢と一緒に仕事は嬉しいだろうよ」

スバルは自分の憧れを見つけてそれを目指して行き、ギンガはフエイトとは仲も良いし常々一緒に仕事をしてみたいと言っていた。

「しかしまあ、お前も気が付きや俺の上官なんだよな。魔導師キャリア組の出世は早えなあ」

「魔導師の階級なんてただの飾りですよ。中央や本局に行けば、一

般仕官からも小娘扱いです」

「だろうな。——っと、すまん。俺も小娘扱いしてる」

苦笑いしながら言ったはやての台詞に、思わず同意してしまうゲンヤ。

だがはやては特に気にする様子もなかった。なぜなら——

「ナカジマ三佐は今も昔も、私が尊敬する上官ですから」

「……そうかい」

とそこへモニターが開く。

『失礼します。ラット・カルトス二等陸尉です』

「おう。八神二佐から外部協力の依頼だ。ギン連れて、会議室でちよいと打ち合わせしてくれや」

『はっ。了解しました』

と言ってモニターの通信は切れ、ゲンヤとはやての二人は立ち上がる。

「つうこった」

「はい。ありがとうございます」

「打ち合わせが終わったら、飯でも食うか？」

「はい！ よろしく願います」

はやては嬉しそうに微笑み、二人は揃って会議室へ向かって歩いていく。

時刻は午後七時。ミッドチルダ首都クラナガンの中央区にある時空管理局地上本部。

フェイトとシャリオの二人は中央本部まで赴き、今回回収されたレリックとガジェットについて調べていた。

「レリック自体のデータは以上です」

「封印はちゃんとしてあるんだよね」

「はい。それは嚴重に」

ピッピッピッとシャリオがキーを叩く。

「それにしても、よく分からないんですよ。レリックの存在意義って」

「……うん」

シャリオの意見にフェイトも同意する。

「エネルギー結晶にしては、よく分からない機構が多いし。動力機関としてもなんだか変だし」

「まあ、直ぐに使い方がわかる様な物なら、ロストログア指定はされないもの」

フェイトの見解にシャリオも「そうですね」と同意しながらキーをタッチしてモニターをどんどん切り替えていく。

「あ、こっちはガジェットの残骸データ？」

「はい。こっちはシグナムさんやヴィータさんが捕獲してくれた物と、変わらないですね。新型も、内部機構事態は大差ないし」

次々と開いていくガジェットの画像データ。壊れている部分から内部の機構が見えたり、一部分にアップしたりと沢山の画像が開いていく。

「っ！」

だがその中に、フェイトの目をくぎ付けにする物があつた。

「ちょっと戻して、さっきのガジェットの残骸写真」

「あ、はい」

「多分、内面機関の分解図」

「だとしたら……この辺り？」

シャリオが画像を閉じながらゆっくりと戻していく。

「それ！」

フェイトが画像を止めさせ、アップする。そこには、青い宝石がはめ込まれていた。

「これ、宝石？ エネルギー結晶か何かですかね？」

シャリオはその宝石に見覚えはなかったが、フェイトにはそれはとてもよく覚えのあるものだった。

「ジュエルシード」

すべての始まりにして終わりの原因となった。フェイト達にとってはとても馴染みのあるものだった。

「随分昔に、私となのはが探し集めてて、今は局の保管庫に管理されてるはずのロストログア」

「へえ、なるほどお——って、なんでそんな物が!？」

一瞬納得してしまったが、シャリオはすぐに今の異常性を認識した。本局の保管庫で管理されている筈のロストログアが、今こうして外にあり、ガジェットの一部として使用されている。

「シャーリー、ここ。ここ拡大して。何か書いてある」

「あ、はい」

シャリオは素早くキーをタッチして、フェイトが指差した部分の画像を拡大して別のウィンドウに表示する。

「これ、名前ですか？ ジェイ……」

「ジェイル・スカリエッティ」

フェイトは横からキーをタッチして別のモニターを開き、本局の犯罪者データライブラリにアクセスしてある一人の人物のデータを展開する。

「Dr・ジェイル・スカリエッティ。ロストログア関連事件を始めとして、数え切れないほどの罪状で超広域次元指名手配されている、一級搜索指定の次元犯罪者」

フェイトが開いたモニターにスクロールするように罪状の文が流れていく。その量は六年前の事件で逮捕したあの人とは比べ物にならないほどの量だった。

「次元犯罪者？」

「ちょっと色々あってね。何年か前からずっと追ってるんだ」

「そんな犯罪者が、なんでわざわざこんな分かりやすく自分の手ばかりを？」

「本人だとしたら挑発。他人だとしたらミスリード狙い。でもどちらにしても、私やなのはがこの事件に関わってるって知ってるんだ」

しかし、もしそうならこれまでの謎も一気に説明できる。

「だけど、本当にスカリエッティだとしたら、ロストログア技術を使ってガジェットを制作出来るのも納得できるし、レリックを集め

てる理由も想像がつく……」

「理由……？」

「シャリー、このデータを纏めて直ぐに隊舎に戻ろう。緊急会議をしたいんだ」

「はい。今すぐに」

シャリオはすぐにデータを纏め始める。その間にフェイトは、はやてに連絡を取り会議を開きたい旨を伝える。

はやてはすぐに承認してくれた。そしてそれと共にシャリオはデータを纏め終わり、二人は急いで隊舎に戻る。

そしてその頃、機動六課ではちょうど午後の訓練が終了した所だった。

『お疲れ様でしたあ……』

「はあい」

「ちゃんと寝ろよー！」

『はあーい……』

フォワードメンバーはフラフラになりながら隊舎へと歩いて行った。

ヴィータがそれを見送って振り返ると、なのはが海上訓練場の情

報整理とリセットをする為にキーを叩いていた。

「しかし、お前ホントに朝から晩までずっと連中に付きっきりだよなあ」

「私は機動六課の戦技教官だもん。とうぜんだよ」

「後アレだ。もっと厳しくしないでいいのか？ あたしらが受けた新人教育なんて歩き方から挨拶まで、もう何でもかんでも厳しく言われてたじゃんか」

「戦技教導隊のコーチングって、何処も大体こんな感じだよ」

キーをタッチしながらヴィータに説明していくのは。

「細かい事で叱ったり怒鳴りつけたしてる暇があるなら、模擬戦で徹底的にきっちり打ちのめしてあげる方が、教えられる側としては学ぶ事が多いって、教導隊ではよく言われてるしね」

それを聞いて、ヴィータは心底教導隊はおっかない所だと思ったのであった。

なのはがピッとキーを一つ押すと、海上訓練場の体感型立体映像が消えていく。

「私たちがするのは、真っ新たな新人を教えて育てる教育じゃなくて起動したままのレイジングハートを待機状態の小さく赤く丸い寶石のペンダントに戻して首に巻く。」

「強くなりたいてって、意志と熱意を持った魔導師たちに、今よりハ

イレベルな戦闘技術を教えて導いていく……戦技教導だから」

「……まあ、なんにしても大変だよな。教官ってのも」

「でもヴィータちゃんもちゃんと出来てるよ。立派立派♪」

と言ってヴィータの頭を撫でるのは。

「ちよっ、なんだよ！ 撫でるゝなあ！」

なのはの手を振り払うヴィータ。だがなのはは笑ったまま隊舎へと足を進める。

「それにね」

「ん？」

なのはは海上訓練場から陸へ上がる階段を登り、雲が掛かっているが雲の合間から見える星を見上げる。

ヴィータもそれに吊られて空を見上げる。

「あの人は向こうで自分に出来る事をがんばってる。だから、私も負けてられない」

とても良い笑顔で空を見上げるなのは。それを隣で見るヴィータには、あの人となのはが重なって見えた。

六年前、事件で知り合った掛け替えのない仲間の姿。絶対に諦めず前を見つめ続け、未来を歩む彼の姿が。

「お前らは本当によく似てるよな」

「そうかな？」

なのはも彼も才能が有りながら努力を惜しまない天才。自分たちの夢の為、そして自分へ誇りを持てる様に、諦めず前を見続ける。そう言った所は、二人は本当にそっくりだ。

「諦めの悪いところかな」

ニヤリと意地の悪い笑みを浮かべるヴィータ。

「ヴィータちゃん、あの人の悪い所が似てきた？」

「さあな。とりあえず帰ろうぜ」

「うん。そうだね」

なのははヴィータの言うとおり隊舎に向かって歩いていく。その後ろをヴィータは歩いていく。

「今日の戦闘データ。また分類して、データルームに送つていくれるかな？」

そんななのはの背中を見詰めながら、ヴィータは思う。新人達自分がどれだけ恵まれているのか、そしてなのはのフォローが影ながら彼女たちを支えているのか。

それを知らない新人達がその事に気付くは、まだまだ先になるだろう。

（あたしはスターズの副隊長だから……）

いつかの悲劇をもう一度起こさない為に――

「……お前の事は、あたしが守ってやる」

「ん？ なにか言った？」

「なんでもねえよ。行くぞ、なのは」

「うん、ヴィータちゃん」

★ ☆ ★ ☆ ★ ☆ ★ ☆ ★ ☆

カッン、カッン。という足音が静寂の空間き響く。足音の主はジエイル・スカリエッティと、その少し後ろを歩く黒髪に白い騎士服の神咲璃兔。

長い直線上を歩き、とある場所に向けて一步また一步と歩みを進める。左右には並べられたカプセル状の形したモノがいくつもあり、縦に一列に並べられている。カプセルには“？”から始まり、“？”と次々続くナンバーが刻印されている。一つのカプセルにつき一人の女性が入っているが全てに入っている、という訳ではない様だ。

「相変わらず、悪趣味な研究だな」

璃兎がそう言うのも無理はない。カプセルの人間は、見た目で判断するなら死んでいるようにも、眠っているようにも見える。

「気に入らないかい？」

「別に、一般的に見ればって言いたいだけさ。他人がどんな目に合おうと……俺には関係ない」

「ふふふ。君も十分非道だよ」

「誰よりも人間らしくしているつもりなだけだな」

「ああ、人間らしいさ。私では表現しきれないぐらいにね」

彼らが足を止めると同時に、目の前に大きな通信モニターが開く。そこに映るのは、ウェーブがかかった薄紫の長髪をした管理局の制服を着た女性ウーノ。

『ゼストとルーテシア。活動を再開しました』

ふむ、とスカリエッティは頷き、璃兎は微妙な笑みを浮かべる。

「クライアントからの指示は？」

『彼等は無断での支援や協力は、なるべく控えるように。とメッセージが届いています』

「って言われても、こっちからは俺以外殆ど接触出来ない」

スカリエッティは僅かに肩をすくめて璃兎に同意した。

「全くだよ。自律行動を開始させたガジェットドローンは、私の完全制御下という訳ではない。勝手にレリックの下に集まってしまうのは、大目に見てほしいね」

『お伝えしておきます』

女性はただ言われた通りにするためにモニターを消して通信を終える。

スカリエッティは俯いた顔を上げ、歪んだ表情を浮かべた。

「彼等が動くならゆっくり観察させて貰うとするよ。彼等もまた、貴重で大切なレリックウエポンの実験体だからね…」

そして、小さく笑う。

「そうだ、ドクター」

「ん？　なんだね？」

スカリエッティは振り返り璃兎を見る。

「俺はルーとゼストの所に行こうと思うんだが……」

と言えば、スカリエッティは、ふむっと手を口に当て考える。

「確かに近々合流する予定ではあるし、ルーテシアも喜ぶ、か……
……いいだろう」

「じゃあ後で今の二人の居場所のデータを送ってくれ」

そう言い残して、璃兎は今さっき来たばかりの道に戻って行く。
その後ろ姿はまるで、恨みに吞まれた亡霊の様に殺意と憎悪が満ち
ていた。

第七話 派遣任務 【前篇】

初出勤から三日後。スターズの二人、スバルとティアナになのはから新しい任務を通達されていた。

「え……？ 派遣任務、ですか？」

「しかも異世界に？」

「うん。決定事項。緊急出勤が無ければ、後二時間後には出発だそうだから」

なのははスバルとティアナの二人に指示を出す。

「今の作業を片付けたら、出勤準備をしておいてね？」

「はい、なのはさん」

「了解です」

スバルとティアナは敬礼して返事をする、テキパキと今やっている書類仕事を片付けに入る。

そしてそれはフェイト率いるライトニングにも通達されていた。

「レリックか、ガジェットの出現なんでしょうか？」

「まだ分からないけど、ロストログア関連ではあるみたいだね」

フェイト達はそれぞれの準備の為に隊舎に向かって歩いている。

「まあ、前線メンバー全員出動だし、いつもの任務とあまり変わらないよ。エリオもキャロも、平常心でね」

『はい！』

「じゃ、準備して、屋上ヘリポートに集合ね？」

『はい！ フェイトさん』

エリオとキャロはフェイトに敬礼して、準備の為に自室へと走っていく。

そして今回の出動は、はやて自身の口からシンにも伝えられていた。

「派遣任務の同行、ですか……」

「そうや。まだあの子だけだと不安やし、規模もわかってないからな」

「一応ロストログアが相手ですから、万全を規すに越した事はないのです」

はやてとリインが、シンの同行をお願いする理由を述べる。

シンは右手を顎に乗せて考える。しかし、直ぐに姿勢を正してはやての眼を見て答える。

「分かりました。直ぐに準備します」

「もしかしたら数日かかるかもしれへんから、それぐらいの気持ちでおってな」

「はい。では、そのつもりで準備しておきます」

「うん。よろしくな」

「いえ、失礼します」

シンは敬礼して部隊長室から出ていく。
隊舎への道のりの廊下で、シンはファフニールと話す。

《まさか、レリック専門の機動六課が別のロストログアを回収に向かうなんてね》

「確率的には低いが無い訳でもない。が、普通はしない」

それでもやるのは、依頼者がこの機動六課の後見人でこの六課自体が実験舞台という名目が故の為だろう。

「出来ればミッドを離れたくはないが、無理に断っても後に響くだけ。今は大人しく従っておくべきだな」

《まあ、そうよねえ》

「例の件を完遂する為にも、此処の人間の事情を把握しておく必要もある」

《……例の件、ね》

シンは周りに他の局員の姿を視界に捉え、ファフニールとの会話を終わらせる。そのまま隊舎へと向かい、準備を始めるのだった。

それからちょうど二時間後。

バラバラ！とプロペラを回転させるヘリが待機するヘリポートには、準備を終えたスターズの二人が既にスタンバイしていた。

「あ、エリオ！ キャロ！」

スバルが荷物を抱えて走ってくるエリオとキャロの小さな二つの姿を見つけて手を振る。

「スバルさん、ティアさん」

「すみません、お待たせしました」

「まだ時間あるわよ。隊長たちも来てないしね」

とティアナがライトニングの二人を落ち着かせる一言を言った直後、ヘリポートに隊長陣の姿が見えた。

なのはとフェイト、そしてシンはもちろん。ヴィータやシグナム、はやてとシャルまでが荷物を持って現れた。

「おー、みんなお揃いやね」

「あれ？ 八神部隊長にヴィータ副隊長……」

「シグナム副隊長にシャル先生も……」

スバルとキャロがそれぞれの副隊長とその隣に立っている人物の名を呟く。

「私もいるですよー！」

「リイン曹長にセレスティア三尉まで……」

ティアナも、よくよく見ればはやての肩の上にはリインまでいる事と彼女たちの後ろにシンがいる事に気づく。

「まさか、この全員で出動ですか？」

エリオがそう尋ねるとがはやてとなのはが答えた。

「うん。部隊はグリフィス君が指揮を執ってくれる。ザフィーラがしっかり留守を守ってくれる」

「詳細不明とはいえ、相手はロストログアだし。主要メンバーは、全員出撃って事で」

「後は、行き先も、ちょっとね」

フェイトが少し嬉しそうに言うと、ティアナがはやてに尋ねた。

「行き先……何処なんですか？」

「第九十七管理外世界。現地名称、地球」

とそこまで言って、フォワード陣はハッとした。

「小さな島国の小さな町。日本、海鳴市。ロストログアはそこに出現したようや」

「地球って、フェイトさんが昔住んでたっていう……」

キャロがフェイトの方を見れば、フェイトは微笑んで小さく頷く。

「私とはやて隊長は、その生まれ」

「そうや」

「私たちは六年ほど過ごしたな」

「うん。向こうに戻るのは久しぶり」

シグナムとシャルは懐かしそうに目を細める。かれこれもう一年以上も地球に立ち寄ってすらいないのだ。懐かしくもあるだろう。

「まあある程度の広域捜査にもなるから、司令部も必要やしな」

「つー事で、出発だ。準備はいいか？」

『はい！』

ヴィータの問いに、フォワード四名は元気よく答える。

「では、出発！」

なのはがそう言うと、その場で立っていた一同は次々にへりに乗り込む。全員が乗り込み、座席に座った所で転送ポートがある中央本部へと向かってへりは飛翔する。

暫くしてへりが安定飛行に入ると、それぞれ話し始めた。

「ちょうどこの間、みんなの故郷の話をしたばかりで、不思議な感じですね」

「ははは！　ほんとだね」

エリオの何気ない言葉にスバルは楽しそうに笑う。

「ええっと……」

キャラが覚えてたのモニター操作でこれから行く世界についての情報を開示する

「第九十七管理外世界。文化レベルB」

「魔法文化なし。次元移動手段なし——って、魔法文化ないの？」

「ないよ。ウチのお父さんも魔力ゼロだし」

キャラの開いたモニターを覗いたティアナの朗読に、スバルが答えた。

「スバルさん、お母さん似なんですよね？」

ときやりが言うと、スバルは「うん」と笑顔で頷く。しかし、それが逆にティアナの疑問となる事になった。

「いや、なんでそんな世界から、なのはさんとか八神部隊長みたいなオーバーSランクの魔導師が……？」

「突然変異というか、たまたまな感じかな？」

フォワード陣の会話にはやてが首を突っ込んだ。

「あ、す、すいません」

「ええよ、別に」

「私もはやて隊長も、魔法と出会ったのは偶然だしね」

というなのはの説明に、フォワード陣は「へえ」と納得する。しかしその偶然も、起こるべくして起こった必然。というのが力を持つ者の宿命でもある。だが彼女たちにとって偶然とも必然とも言えるそれは、現在の彼女達に夢を与えたきっかけに過ぎない。そこからどうするかは、彼女たちの意思次第だからだ。

「はい、リインちゃんのお洋服」

「わーい！ シャマルありがとうございます！」

シャマルがトランクから子供用の洋服を取り出す。だがリインにはあまりにも大き過ぎた

「リインさん、その服って……」

「はやてちゃんの、小っちゃい頃のお下がりです」

「いえ、そうではなく……」

「なんか普通の人のサイズだなんて……」

というキャロとエリオの言葉の意味を考えるリイン。だが漸くその意味を理解した。

「ああ！　そういえばまだフォワード陣には見せてなかったですね」

『……？』

リインの言葉を今度はフォワード陣が理解できなかった。だがそんなフォワード陣を無視して、リインは浮かび上がりヘリの中心へと移動する。

「システム、スイッチ。アウトフレーム・フルサイズ！」

パァン！とやや青白い光が弾ける。

『おお！？』

『うわぁ！』

四人が驚きの声を上げる。

「っと、一応これぐらいのサイズにも慣れるですよ」

と言ってヘリの床に降り立ったのは、とても大きくなったリインだった。だが――

「デカツ!？」

「いやそれでも小っちゃいけど」

「普通の女の子のサイズですね」

（お前ら……漫才でもすればいいのに。そっちの方が才能あるから）

――シン、酷いよそれは……。

というフォワード陣の反応の方が面白かったのか、シンは陰で含み笑いでファフニールはそれに密かにつっこんでいた。

「向こうの世界にはリインサイズの人間も、フワフワ浮いてる人間もいねえからな」

「いや、一応ミッドにもいないと思います」

「はい……」

ヴィータの台詞にツッコミを入れるティアナとスバル。そんなスターズ二人をほっといて、リインはエリオとキャロに近づく。

「うーん、大体……エリオとキャロと同じぐらいですね」

「ですね」

「リインさん、可愛いです」

「えへへ♪」

「リイン曹長、そのサイズでいた方が便利じゃないんですか？」

「こっちの姿は、燃費と魔力効率がよくないんですよ。コンパクトサイズで飛んでる方が楽ちなんなんです」

「なるほど」

リインの話題が一段落したところで、ヘリが目的にを目前としていた。それに気づいたシグナムがはやてに声をかける。

「八神部隊長、そろそろ」

「ん。それじゃなのは隊長、フェイト隊長。私と副隊長はちよ寄る所があるから」

「うん」

「先に現地入りしてるね」

『お疲れ様です』

ヘリが中央本部に降りると、はやては別れ際に一言。

「あ、そや。なのはちゃん」

「ん？ なに？」

「帰りは一人増えるかもしれへんから。楽しみにしといてな」

とだけ言って本部の中に消えていった。残されたなのは達はそれぞれ首を傾げながらも、転送ポート目指して歩き始めた。

★ ☆ ★ ☆ ★ ☆ ★ ☆ ★ ☆

つがい
番らしい二羽の小鳥が戯れながら飛んでいく。さあ……つと優しい風が吹き抜け、柔らかな草が風に揺れ、林の木々がサラサラと鳴く。

そんな心地いい自然の中に、真っ白なミッド式の円形魔方阵が展開されて光が溢れる。その光が収まって、魔方阵が消え、光の中から現れたのは、なのは達を始めた八人だった。

「はい！ 到着でえーす！」

リインが大袈裟に騒ぐ。

「は〜……」

「ここが……」

「なのはさん達の、故郷……」

キャロが感動し、ティアナとスバルは周りの光景に見とれている。

「そうだよ」

「ミッドとほとんど変わらないでしょ？」

フェイトとなのはが言うと、ティアナは辺りを見回し始める。

本日の空は快晴。そして柔らかな風が吹き、林の向こう側に大きな湖が見える。

「空は青いし、太陽も一つだし……」

「いったいどんな世界を想像してたんだ、お前は。そう思うシンとファフニールがいた。」

確かにたまに例外もあるが、ほとんどの人が生きる世界の環境は似たり寄ったりになるはずだ。なぜなら、人類の進化にはある種の法則と条件があり、同じように進化してくれば人の姿も世界の形もよく似てくる。と、ミッドのとある有名な学者が言い残している。

「山と水と、自然の匂いもそっくりです♪」

「キュクルー！」

キャロが全身で自然を感じていると、フリードも気持ちよさそうに鳴いた。

「というか、此処は具体的には何処でしょう？　なんか、湖畔のコーナージって感じですけど……」

とティアナが言う。確かに近くには木造の建物が立っており、いかにも避暑地と言える場所になっている。

「現地の住人がお持ちの別荘なんです。捜査員待機所としての使用を、快く許諾していただいたですよ」

「現地の方……」

キャロがその人物を想像したところに、一台の黒い普通車がやってきた。

「自動車……こっちの世界にもあるんだ」

「ランスター陸士は此処を何処だと思ってるんですか……」

シンは頭を抱えたまま、結局ティアナのボケっぷりに耐えきれずツツコミを入れてしまった。

そしてついでとばかりにティアナに長文の説明を開始する。

「この世界の文化レベルはB。そして文化レベルはAがミッドチルダなどの管理世界。そしてB以下が魔法無の管理外世界に指定される基準になっている。文化レベルがCならば今の発言も理解できる。Cは言わば技術が発展しておらず、文明が確認できるぐらいだからだ。文化レベルBは言うなれば技術が発展してはいるが、魔法技術がない。お前は文化レベルBを舐めているのか？ ミッドも魔法文化が無かったら文化レベルBと同じなんだからな」

「す、すいません。認識を改めます……」

思わず巢が出てしまっているシンだが、返ってそっちの方が威圧

感が出てティアナも反省したようだ。

そして車が止まり、中からオレンジがかった金髪の女性が飛び出してきた。

「なのは！ フェイト！」

「アリサ」

「アリサちゃん！」

フェイトとフェイトが彼女に駆け寄る。

「なによお、ご無沙汰だったじゃない」

「あはは、ごめんごめん」

「色々、忙しくって」

「あたしだって忙しいわよ。大学生なんだから」

「アリサさん。こんにちわです」

「リイン！ 久しぶり」

「はいですう♪」

十年來の親友との再会にはしゃぐ三人と一人。その様子をポカーンと眺めているフォワード陣に、フェイトが気が付いてアリサの紹介を始める。

「紹介するね。私となのは、はやての友達で、幼馴染」

「アリサ・バニングスです。よろしく」

『よろしく願います!』

フォワード陣は声を揃ろえてお辞儀をするが、シンは無言で頭を下げるのみ。

「あ、そういえば、はやて達は？」

ふとははやて達の姿が見えない事に気が付いたアリサに、リインとフェイトが答える。

「別行動です。用を済ませてから別の転送ポートで来るみたいです」

「多分、今頃……すずかの所に居ると思う」

「そっかそっか。じゃあ、とりあえず中に入る？ 荷物は置いときたいでしょ？」

「助かります、アリサさん」

アリサの計らいで、荷物を別荘の中に運び込む一同。適当に整理して置き終わり、別荘内でシンがモニターを開いていく。

因みにアリサはすずかを迎えに車を走らせていった。

「さて。じゃあ改めて、今回の任務を簡単に説明するよ」

『はい!』

なのはがシンに目配せして、シンは海鳴市を上空から撮影した地図をモニターに出す。

「搜索地域はここ。海鳴市内の全域。反応があったのは、ここと、ここ」

次々と赤い光点として示されていくロストログアの反応が確認された地点を表示していく。

「移動してますね」

「そう。誰かが持って移動してるか、独立して動いているのかわからないけど」

ティアナの指摘をフェイトは肯定する。

「対象ロストログアは一度だけ目撃されてはいるんだけど……今のところ確認されてない」

「一応、目撃証言の情報だと低いとされています」

シンがなのはの説明の補足し、続きをフェイトが引き継ぐ。

「仮にレリックだったとしても。この世界は、魔力保有者は滅多にいないから、暴走する危険性はかなり低いね。まあ魔力を持つてる人は数人いるけど、全員魔法知識を持つてるし、私たちの知り合いだから大丈夫」

「とはいえ、相手はロストログア。何が起きるか分からないからわ

からないし、場所も市街地。油断せずに、しっかり搜索していこ」

なのはが気合を入れ――

「それじゃ、副隊長達には後で合流してもらうので……」

フェイトが予定を言い――

「こちらは先行して搜索に出てください。迷ったらこっちでナビゲートします」

『はい!』

シンの指示にフォワード陣はビシッと背筋を伸ばして返事を返す。

「シン君は此处で待機。はやて部隊長の指示を待つて」

「了解です」

スターズはスバルとティアナ、そしてなのはとリインに分かれ、ライトニングはシグナムと合流を目指しつつ、三組に分かれて反応があった場所に向かう。

そしてそれぞれが搜索開始地点に揃うのを待つて、はやてが任務開始の合図を出した。

シンは別荘ではやてとシャマルを待ちながら、スターズとライトニングから送られてくるデータを整理し続けた。

★ ☆ ★ ☆ ★ ☆ ★ ☆ ★ ☆

あれから数時間後。もう日が暮れ始めた夕暮れの時間帯。二つの分隊のおかげかなり搜索も進み、大体の地区にサーチャーを置けた。これならばいつでもロストログアが活動を始めてもわかるだろう。

——ロングアーチからスターズとライトニングへ。

なのは達とスバルたちが合流した頃を見計らったように、シンから念話がある。それに続いてシヤマルとはやてが話す。

——教会本部から新情報がありました。問題のロストログアの持ち主が判明。運搬中に紛失したとの事で、事件性は無いそうです。

——本体の性質も逃走のみで、危険性は無し。ただし、大変高価な物なので、出来れば無傷でとらえてほしいとの事。まあ、気い抜かずにしっかりやろ。

——了解。

二人の連絡に、全員が同時に返事を返す。

「ちょっと、肩の力は抜けたかな？」

「はいです……」

「ほっとしました」

「うん」

それぞれ安堵の息を漏らすリインとスバルとティアナ。

「というか。もう日も傾いてきましたし、晩御飯の時間ですねえ♪」

と今にも涎を垂らしそうなリイン。そんなリインを見て、なのはクスリと笑うとフェイト念話を送る。

——ライトニング、そっちはどう？

——こちらライトニング。こっちもひと段落ついたから、待機所に戻るよ。ロングアーチ、何か買って帰ろうか？

——こちらロングアーチ。ありがたい事に、夕食は民間協力者のみなさんが用意してくれるそうや。

——了解。じゃあ、スターズの皆を、車で拾って帰るね。

——ありがとう、フェイト隊長。

念話を終えて、なのはは何か考え込む。そして――

「……でも手ぶらで帰るのもなんかなあ？」

と呟くと、徐に懷からストラップの突いた可愛らしい携帯電話を取出し、電話帳からリダイヤルする。暫くすると、かけた電話に相手が出た。

「あ、お母さん？　なのはです♪」

『えっ！？』

スターズの二人が変な声を漏らす。

「にやはは♪ うん。仕事で近くまで来てて……。そうなの。
……ほんとに、直ぐ近く。でね、現場の皆にウチのケーキ差し
入れで持って行ってあげたいから……。えっと、二十人分ぐらい」

——なのはさんの、お母さん……。

——そ、それは、存在してて当然だけど……。

実家に電話するなのはの隣で、スバルとティアナは失礼な念話を
交わす。

やっぱり想像できないのだろう。なんせなのはは局員の憧れで、
自分たちの教官で、白い悪魔なんて呼ばれている人物なのだから。

「さて、ちょっと寄り道」

「はいですう」

そうこう考えている間に、電話を終えた

「あの、今お店って……」

「うん。ウチ喫茶店なの」

「喫茶翠屋。おしゃれで美味しいお店ですよ」

『ええっ!?!』

再びティアナとスバルに衝撃が走った。

その後、フェイトに翠屋に来てもらうように伝えてから、なのはの実家に向けて出発。

数分後。辿り着いた喫茶店の扉を押し開ける。

「ただいまー!」

「なのは! おかえりい!」

お店に入ってきたばかりのなのはを抱きしめるなのはの母桃子。

——お母さん若っ。

——ホントだ……。

喫茶翠屋の桃子パティシエは不老である?という、この海鳴市の七不思議の一つとして密かに広まっていたりする。

「桃子さん、お久しぶりですう!」

「リインちゃん、お久しぶりー!」

なのはからリインを抱き付き変える桃子。

「お、なのは！ やっと帰ってきたな」

「おかえり」

更にカウンターの奥から父士郎と姉の美由紀が出てきた。

「お父さん、お姉ちゃん——ってあれ？ アル君は？」

「アル君は今日、午前だけのシフトなのよ。それに元々今日は予定が入ってたみたいよ。それも女の人と♪」

と桃子が意地悪そうにウィンクしている。だが最後の台詞に、なのはは胸に瞬きぐらいの一瞬だけ、僅かな違和感を覚えた。

「え、あ、ああ……。そ、そうなんだ……。まあアル君、昔からモテてたからね」

なのはは残念そうに肩を落とす。それを見た美由紀と士郎は、ニヤリと頬を吊り上げた。

「そうか、アル君に会えなくてそんなに寂しいのか、なのは」

「そうだねえ。なのははアル君に逢えなくて寂しいのか」

「寂しかったのね、なのは」

「ち、違うよ！ 暫く会ってなかったらで、別にアル君に会いたかった訳じゃなくて！」

妙に『あえない』を強調して言う三人に、なのはは真っ赤になって否定する。だが、逆にその否定が三人の意地悪を助長している事に気づかないのは。

「ええつと、ええと……あ。この二人は私の生徒」

なんとか話題を探そうと必死に頭を回転させ、傍に控えていた二人を紹介するという逃げ道を見出した。が、それも二人にはバレバレで僅かに頬が上に吊り上っている。

「あ、スバル・ナカジマです！」

「ティアナ・ランスターです」

お辞儀して自己紹介をする二人。

「此処でフェイトちゃんと待ち合わせ中なんだけど……居ても平気？」

「勿論♪」

なのはの問いに笑顔で答える桃子。

「あ、二人とも。コーヒーとか紅茶とか、いけるかい？」

「あ、はい」

「どっちも好きです」

好き嫌いなどあるのかどうかすら怪しいスバルが答える。

「リインちゃんは、アーモンドココアよね」

「はいですう」

桃子は飲み物を取りにカウンターの奥へ行く。その間にスバルとティアナは、なのはの案内に従ってテーブルに着く。

「二人ともお仕事大変だろうから、元気が出るミルクティーね♪」

「はい！」

「ありがとうございます」

桃子の用意してくれた暖かいミルクティーに手を付ける。

暖かくて美味しそうな香りが香ってきて、一口含めば優しくて甘い味が口全体に広がる。それなのに後味はともさっぱりという、見事なミルクティーだった。

「しかし二人とも。ウチのなのはは、先生としてはどうだい？ お父さん、向こうの仕事の事は、どうにもよく分からなくてな」

あははっと頭を掻きながらスバルとティアナに尋ねる。

「あ、その……すごくいい先生で」

「局でも有名で、若い子の憧れです」

『へえ……』

桃子と美由紀が声を揃えて感心する声が重なり、なのはが恥ずかしそうに縮こまる。

「あ、そういえば。お兄ちゃんと忍さん、元気？」

「うん。こないだ一度、久しぶりに戻ってきたよ。直ぐドイツに戻っちゃったけど」

「そっか。二人とも、お仕事忙しいもんね」

「なのはもね。アル君、またあいつは言わないと帰って来ない！
って言ってたよ？」

「にやはは……あ、会わなくてよかったかも」

「アル君もなのはを心配しての事なんだから、なのはも反省しないとだめよ？ はい、ケーキ二十個入りね」

「ありがとう♪」

家族の会話を繰り返すのはを見て、スバルとティアナは念話で感想を呟いていた。

——なんか、なのはさんが普通の女の子に見える。

——う、うん……。

彼女たちはなのはを一体なんだと思っているのだろうか。

「お、そうだ！ みんな、クッキー食べるか？ これが自慢の新作

でな」

「ど、どうぞ、お構いなく……」

「でも……美味しそうです」

「じゃあ、ラインに一個」

「えへへ。いっただっきます」

★ ☆ ★ ☆ ★ ☆ ★ ☆ ★ ☆

なのは達が翠屋で時間を潰して約十分後。フェイトを初めとしたライトニング隊を乗せたフェイトの黒い車が迎えに来た。スターズの三人はそれに乗ってアリサに貸してもらったロッジに向かった。それからまた十分ほど車に揺られ、漸く司令部に戻ってきた一向。

「運転お疲れ、フェイトちゃん」

車から降りたのはは、此処まで送ってくれたフェイトを労う。その周りでは、キャロとフリードがどこからか漂ってくる良い匂いに気づいた。

「なんか、ちょっといい匂いが……」

「キュー」

「はやて達が、もう晩御飯の準備をしてくれてるのかな」

とフェイトが言いその方向に目を向けると、そこには――

「おかえりー！」

「なのはちゃん！ フェイトちゃん！」

アリサと、青紫色のウェーブがかったロングヘアを揺らしながら手を振って走ってくるもう一人の親友、月村すずかの二人が走ってきていた。

「すずかちゃん」

「すずか」

なのはとフェイトも駆け足で駆け寄り、手を取り合って再会を喜ぶ。

「にやはは、久しぶりい！」

「すずか、元気だった？」

「うん」

「写真とメールばかりで声、聞けてなかったもんね」

「だよねえ」

次元世界での次元通信でメールのやり取りをしていた。それは魔法技術を持たない彼女達には、通話できる次元通信ができないからである。

「大学の方、相変わらず？」

「勉強大変」

「なによ。成績優秀で、男にはいつも囲まれてて、理想のキャンパスライフじゃない」

「そ、そんなことないよお！ この前だってそれで危ない目に遭ったのに」

「そ、そうなの？ すずか」

「うん。この前、アリサちゃんと買い物してたら、七人八人の男の人に囲まれちゃって」

「しかもその全員が元運動部だったとかで力が強くなって追い払えなくてね。危うくどこかに連れていかれる所をアルに助けてもらったのよ」

「アル君に？」

「たまたま近くまで配達に来てたみたいで、私達が絡まれてるのに気付いて助けてくれたのよ」

「凄かったよ。投げたり蹴ったり、吹き飛ばしたり」

「人が宙を舞う光景なんて、初めて見たわよ」

『あはは、あの人ならやりそう……』

すずかとアリサの話になのはとフェイトは呆れ顔で苦笑いを漏らした。

そしてその様子に呆気を取られながら眺めていたフォワード四人は、また失礼な念話を繰り返していた。

——ティア。やっぱり隊長さん達が普通の女の子だよ。

——同感……。どうよ、ライティング的には？

——あの……。僕的には、なのはさんもフェイトさんも、普通の女性です……。

——そっか。エリオ君は私たちの中だと一番昔から、なのはさん達の事知ってるんだもんね。

——うん。

とそれぞれがそれぞれの感覚で納得していると、一台の普通車が近くまでやってきた。

「あ、車が……」

エリオがそれに気づき、フォワード陣四名が見守る中、すぐそこで停車してドアが開く。そこから出てきたのは――

「はぁい」

「みんな、お仕事してるかぁ？」

「お姉ちゃんズ、参上♪」

先ほどまで一緒にいた美由紀を含め、赤茶色のショートヘアの女性エイミー・ハラウンと、オレンジ色の長髪に同じ色の獣耳と尻尾を生やした少女アルフだった。

「エイミーさん……」

「アルフ！」

エリオとキャロがエイミーとアルフが出てきた事に目を丸くし――

「それに……美由紀さん？」

「さっき別れたばかりなのに」

スバルとティアナは美由紀の早すぎる再登場に目を点にした。

「いやぁ、エイミーがなのは達に合流するって言うから。私もちやうど、シフトの合間だったし」

「そうだったんですか」

楽しそうに言う美由紀に圧倒されながらも頷くスバル。

「エリオ、キャロ。元気だった？」

『はい！』

「二人とも、ちょっと背え伸びたか？」

「あはは、どうだろ？」

「少し伸びたかも」

「うんうん♪」

アルフはエリオとキャロの成長を喜ぶかのように嬉しそうに頷く。

——うゝん。誰かの使い魔かな？

——犬耳と尻尾……ワンコ素体？

——見た目十歳ぐらい？ 小っちゃくて可愛い！

「アルフー！」

とスバルとティアナが念話で会話していると、フェイトが今まさに注目しているアルフを呼びながら走って戻ってきた。

「フェイトー！」

フェイトの声に敏感に反応して耳がピクピクと動き、その方向を向くと同時に跳んだ。

「フェイト！ フェイト！」

フェイトに飛びついてフェイト名前を何度も読んで尻尾を千切れんばかりに振っていた。

「アルフ、元気そうだね」

「元気！」

「いやー、アルフにはホントにお世話になりっぱなしだね。ウチの子たちの、お世話と遊び相手」

「そうですか」

フェイトの跡から歩いて来たのはも会話に加わる。

「ハラオウン家の使い魔だからな。チビたちの世話、楽しいし」

「エイミイ、カレルとディエラは？」

「義母さんが見てくれてる。連れて来ようか思ったんだけど、そろそろお眠の時間だしね」

「そっか」

とフェイト達が和んでいた頃、フォワードの四人は何処からか漂ってくるいい匂いに誘われる様に走っていった。

「お、みんなお帰りー！」

『や、八神部隊長!?!』

ロッジに向かって走っていけば、そこにははやてがエプロンけて野菜やお肉や焼きそばを鉄製の鉄板の上で焼いていた。

「部隊長自ら鉄板焼きを!?!」

「そんなの私たちがやります!」

そのあまりの光景に動揺しながら驚愕するフォワード陣。だがはやてはそんな四人に苦笑いしながら答えた。

「うーん。でも待ち時間あったし、お料理は元々趣味なんよ」

「はやて部隊長の料理はギガうまだぞ。ありがたくいただけー」

『はい!』

フォワード陣の横を通り過ぎながらのヴィータの台詞に、フォワード四名は安堵したように応える。

「時にシャル。お前は手を出していないだろうな?」

「あ、シグナムひどーい!」

「ちょ手伝ってくれたよな。材料切るとか」

「まあ、切るだけなら……」

「大丈夫だな……」

ヴィータとシグナムが顔を見合わせて頷き合う。

「シャル先生……。もしかして……」

「違うもん！　シャル先生、お料理下手なんかじゃないもん！」

とシャルが必死に取り繕うとしていると、また新しい人物がロツジから出てきた。

《お前の料理が下手なのは周知事実だろう。今更取り繕っても遅い》

「あー！　ウルフまでひどーい！　シャルさん、泣いちゃうから！」

銀髪ショートヘアに青い瞳の青年アル・スフィニールが、切り分けたお肉と野菜が盛られている大きなお皿を両手に片方ずつ乗せて歩いてきた。

更にその胸に小さなチェーンで繋がった白い宝石が詰め込まれた銀色の指輪がぶら下がっている。そこから貫録のある男の音声が響く。

「おい、八神。肉と野菜の追加。持ってきたぞ」

「あ、そこ置いといて。ありがとな、アル君」

「翠屋の仕事だからな。ウェイターこれぐらいならいくらでもやってやるさ」

はやての近くのテーブルに持ってきたお皿を置くアル。

「あ、アル君!？」

フォワード陣の後から来たのはがいる筈のない人物を見て驚愕の声をあげた。

「ん？」

アルが声がした方を振り向けば、そこには驚きで目を丸くしているなのは。そしてその様子に苦笑いしているフェイト。そしてそして、そんなのはを見て笑いを堪えているアリサとすずか。四人の姿と、更にはエイミィ、美由紀、アルフの姿を確認する。

「な、なんで此処にいるの？ 今日是用があるって、お母さん言ってたんだけど」

「ああ、今日は元々八神に呼び出されてたんだ。どうしても頼みたい事があるって言うからさ」

ポカーンとしているなのはに説明しながら近づくアル。

「それを説明する前に……」

状況がいまいち飲み込めていないのはは若干放心状態気味でいる。アルはそんな状態のなのはの額に人差し指を丸めて親指で固定して宛がい――

「あうっ!？」

ビシッ!と弾いた。

「何するの……」

「意識がなかったから気づけ。そして半年帰って来なかった事への罰」

と言いながら微笑するアルを、なのははまだ若干ヒリヒリする額を抑えながら睨んでいたが――

「お帰り、なのは」

というアルの微笑んでの一言に、毒気を抜かれ――

「ただいま。アル君」

なのはも微笑んで返した。

――なのはさんが乙女だ。

――ええ。

その様子をスターズの二人は物珍しそうに観察していたのであった。

「それじゃ、私も手伝うよ」

「私も。フォワード一同、食器出しと配膳、お願いしていい?」

『はい!』

なのははアルの後を追いついて、フェイトがフォワード陣に指示を出し

てフォワード陣は近くのテーブルに駆けていく。

「あはは、元気だ」

「みんな、可愛いね」

とアリサとすずかが思っていると、ロッジの中からシンが出てきた。どうやらはやてに任されていた広域捜査のデータ整理と機能確認が終わったらしい。

「八神部隊長、こっちは終わりました。後は向こうが罠に掛かるのを待つだけです」

「ご苦労様。ありがとな、シン君。助かったよ」

「いえ、仕事ですから」

シンはそう言って一礼すると「顔洗ってきます」と言って湖へ歩いて行ってしまった。

「……………」

その背後をただ黙って一人見つめるフェイトは、十分距離を取りながら後を追う。勿論、気づかれないように魔力は最小限まで抑えて距離も十メートル以上離れて尾行している。

機動六課が正式稼働を始めてから、昼間のシンは殆どその姿を自分たちには見せない。それだけならば、ただ避けられているだけだと思うだろう。だが、一般局員からすら目撃情報は少ない。

一人で居たい性分だから人目の着かない所に居るんだと言えば、確かにそうかもしれない。しかしそれだけでは説明できない事が、

一般局員が目撃していたのだ。

やがてシンは湖に辿りつき、はしけ艇に膝を突いて湖の水を救う。フェイトはその様子を遠目から、一本の木の陰に隠れて眺める。

「……バルディッシュ。此処から音声、拾える？」

《Can》——可能です。

「じゃ、お願い」

その手に握るバルディッシュが、キラリと光って応える。

——このてい……余裕……言え……使い……らい奴……。

バルディッシュが拾ってくる音声が直接フェイトの頭に響いてくるが、どうにも要領を得ない。

《Jamming has been》——ジャミングされているます。

どうやらシンは、小規模のジャマーフィールドを展開しているらしく、途切れ途切れの言葉しかわからない。

——こんなくだら……物如きに……ミッドから……れる事……とはな……。

とりあえずで聞こえてくる単語を、フェイトは記憶していく。

（くだらない物は、多分ロストログアで、ミッドはミッドチルダ。その後にくるのは多分……離れる）

——オレは……だ……いつまで……こんな所に……けないだろ……
直ぐに……出ていく……。

そこでデバイスとの会話が終わったのか、シンはゆっくりと立ち上がった。

それを見て、フェイトは気付かれる前にとそそくさとその場を後にする。

（シンはきつと、六課に一分一秒と居たくないんだ。だから、直ぐにでも出ていきたいし、ミッドから出る気もなかった……）

フェイトはこれまで手に入った単語から、シンの考えを読み取りろうと推理する。

（だから……自分から信頼を失わせるように仕向けて、追い出されようとしてる）

出ていくよりも出ていかざる負えなくなる方が、怪しまれたり引き止められたりされない。多少時間は掛かるが、六課を出ていくには確実な方法だった。

そしてそれ程までに自分は嫌われている。だが、それでも、フェイトは彼の事が気になる。瞬きの様な一瞬だけ見えた、哀しい色をした瞳。そこには、全てを諦めながらも逃れられず苦悩する揺らぎがあった。

「やっぱり、知りたい。どうして、あの目をするのか。でも、どうすれば聞けるんだろ……」

そんなフェイトの独り言に呼応するかのように、フェイトの手の

中のバルディッシュが一度だけ点滅する。

そしてその頃、湖ではシンが顔だけを背後に向けて肩越しに金髪が遠ざかっていくのを確認していた。

「フツ……。あの程度で尾行か。笑わせる」

完全に見えなくなったのを確認して、シンは湖に視線を戻す。

《でも十分、気配も魔力も消せてたわよ？ 怪しまれないように微弱な魔力を流して、居なくなっていないように見せかける偽装までして》

「それでも気付かれていたら意味がない。あの程度の存在が……オレよりも……人間、か」

ギリリつと奥歯を噛み締めるシン。だがその表情は、いつもの物と殆ど変らない無表情だ。

《シン……》

「オレはセレスティアだ。誰であろうと……」

シンはそのまま暫く湖を見詰めて数分。そろそろ戻らなければ、と踵を返した。

「オレは完全でなければならない」

第七話 派遣任務 **【前篇】** **（後書き）**

後編へ続く。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5520x/>

魔法少女リリカルなのはStrikerS Guardian Wings

2011年11月13日22時02分発行